
Silver of Mask

YUUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silver of Mask

【Nコード】

N0222Q

【作者名】

YUMI

【あらすじ】

超能力とも少し違うし、魔法とも少し違う『力』を持っている私の大切な人たちと出会った頃のお話。

誰にもばれない様にしてきたはずなのに、女子高生である私を警察は呼びたした。

まさか、と思って扉を開けると・・・これは、最悪だ。

だが、それが今まで明るみに出なかった事件達との決別だった。全

ては記録され、解決していく。

ただ、同じなのは、世間に公開される事はない事。

※ 最初は恋愛要素ありませんし、超長連載予定なので。悪しからず。。。

※ だいたい章ごとに事件がわかるように執筆していますが、事件によって章の長さも異なります。

P r o l o g u e

うん。

気がついたら、自然に当たり前のように“力”を持っていて、使えていた。

何故だろうね。私にもわからない。

別に小説でよくあるような、神様と知り合い、とか、異世界に行き、とかで知識があるわけでもなかった。

いや、私のような例があるんだ。異世界や神様ぐらい存在しているのかも…。

まあ、そんなことは置いといて、私のは、本来呪文とか要らない。思うだけで顕^{あらわ}れる。

そだな。あの頃はかっこつけたかったのかもしれない。逆に呪文なしで発動できる事が秘密で助かったこともある。

そして、今ある大切な人たちとの出会いがその時期で私はとても助けられた。

そーだな、うん。今思うと丁度、時期がぴったりだったんだって思える。

だって、私は“日常”全てを演じることに、とてもとても疲れていたから。

これは、私が高校の時のお話。

“普通”って何？

“異常” ってどれ？

ねえ？

なぜ、自分が受け入れられないだけだというのに“異常”だと決
め付ける？

理解できずに否定し、受け入れることを拒んだソレが、アナタの
いう“異常”か？

随分と視野が狭い。

私にとってはアナタ達という“異常”が“普通”なんだよ。

その“異常”を当たり前のように持っているのが“私”なんだ。

しかし：——

アナタ達がアナタ達という“異常”を忌み嫌うのならば、どうし
ようもなく恐れるのならば、その“記憶”抹消して差し上げよう。

跡形も無く。

アナタ達がアナタ達という“異常”を知らないでいるというだけ
で、偽り無い笑顔を、優しさを向けてくれるというのならば、私は
どこまでも“私”を偽ろう。

誰も判らぬほど、完璧に。

アナタが一度でも本当の“私”を恐れ、忌み嫌い、離れてゆく
ならば、“記憶”を抹消し、もう二度とアナタの前で本当の“私”
は見せず、アナタのいう“普通”な“私”でいよう。

だけど、私は決めた。

誰になんと言われようと、私はその“異常”で人々を守り、救って
いこうと。

その為だけにその“異常”が存在しているんだと感じたあの時か
ら。

Signal of start.

「うゝ…。」

「うゝ、じゃない。どうしてそんなにドジなわけ？ 璃華^{りか}。」

心底呆れたように言われた言葉に璃華はムスツとして頬を膨らませながら立ち上がると癖のあるブラウンの髪についた埃を払った。

「ドジじゃないもん。」

不平タラタラにそう言ってみると、カラーコンタクトの入った眼が細まり、渡り廊下を見渡す。

「段差も何もない平らな場所で転んだあんたのどこがドジじゃないって？」

「うゝ。」

思わず、黙り込むと、前方から長いため息が吐き出される。

「とにかく、教室行こ。」

「っわ?! 待って、麗ちゃん^{れい}。」

いきなり歩き出した麗に慌てて付いて行こうとした璃華は何故かバランスを崩し再び豪快に倒れ込む。その音に麗は振り返らずに立ち止まって額に手を当てた。

「はー…。なんでこんなの友達になったのか今となっては最大級の謎だわ。」

「うゝ…。酷い。」

っていうか、やりすぎて痛い…。

「お、いたいた。って何やってんだ？」

そう言いながらこちらに走ってきた教師に麗はこちらを指差して言った。

「綾瀬さんが、何もない、こんなところで転んでいただけです。」

にべも無くそう答えた麗に璃華はぶっすゝと不機嫌な表情を作ってみせるが、教師はそれどころではないらしく、璃華に顔を向けた。

「そんなことより、綾瀬^{あやせ}。お前一体何しかした？」

急に思い出したかのように真面目な表情を浮かべた教師に璃華と麗は顔を見合わせる。

「今、警視庁の方から連絡が来て、綾瀬璃華という生徒を至急、連れてくるようにって。」

その言葉に璃華も麗も眉をひそめて眼を合わせ、首を傾げた。

「その様子じゃ、身に覚えもなさそうだな。」

「だって、先生。私と璃華。冬休み中ずっとどちらかの家で過ごしていたんですよ？ 出来るわけがないじゃないですか。」

「そうですよ。年末年始は冬太りを気にしながらも美味しい料理をずうっと食べてましたから。」

にいつこりとそう言い放ってみせた璃華のその一言に麗もその教師も同時にため息を吐いた。

「綾瀬に限っては、ありえないな。」

「ええ。在るというのなら是非、その場面を見てみたいです。」

「まあ、大丈夫だろう。綾瀬、お前、車で送ってやってやるから、来い。篠原は教室に行って皆に言っておいてくれ。」

「分かりました。璃華、あんた言動には十分気をつけないさいよ？

この高校にいる全ての人間がアンタと同じように見られるのは頂けないからね。」

そのまま去っていった麗の背中に向かって璃華は邪気の全く無い笑顔を浮かべた。

「はあい。学校の鏡でいるようにがんばってきまあす。」

その一言が聞こえたのか麗は一瞬立ち止まってため息を吐くと振り返らず、そのまま去っていった。

その様子を見ていた璃華は訳がわからないと首をひねっていると肩に手が置かれた。

「：頼むから、綾瀬。大人しくしている。」

「？」

警視庁、ロビー。

「じゃ、綾瀬。終わったら電話しろよ。」

「はあい。ありがとうございます。」

その返事を聞くなり、先生は車に乗って学校に戻っていつてしまった。クルリと方向転換をすると誰も気付かないような小さいため息を吐く。

超過保護。麗もあの教師も。ま、仕方ないことだけど。

璃華は受付へ向かい、呼ばれた旨を伝えたと案内され、やがて辿り着いた先のドアにかかったプレートを見て眉をひそめる。

「警視総監」

そう書かれているプレートがある。ソコから、自分に繋がると事柄といえど一つしかないが、尻尾を捕まれるようなことはないようかなり気をつけているつもりだ。

多少警戒しつつもとおりあえず、目の前のドアをノックしてみると中からどうぞ、と声がかかり、璃華はゆっくりとドアを開けて部屋の中へ足を踏み入れる。

部屋の中には、テレビで見知った米倉総理大臣よねくらとその他に三人いた。その三人のうち誰かが警視総監だろう。

これは……最悪だ。

「そんなところに立っていないでこちらに来て座りなさい。」

かけられた言葉に璃華はおろおろと歩き米倉総理の指差したソファに腰掛けると目の前の四人も璃華の座っている場所とは反対側に腰を下ろした。

「私は……まあ知っているとは思いますが、米倉だ。」

次にその隣に座っている白髪のおじさんが口を開いた。

「私は、警視庁警視總監の役職に就いている下野崎啓吾だ。そして、向こうに座っている君から見て右側が警視庁長官の尾野新。左側が警視庁副總監の柴田哲郎。」

次々とあげられる警察のトップの役職名に璃華は何がなんだが訳が分からないというようにポカン、と四人を眺めるが、その水面下、内心では気がきではなかった。

これはばれている可能性が高い。というか、バレてる。

米倉総理は何かを見極めようとするかのように真っ直ぐに璃華を見据えて口を開いた。

「…まず、君にいくつか確認しておきたいことがある。君は去年の十二月二十日にマンションから身投げをした母子を助けたね？」

それを聞いた途端、ほのぼの璃華を演じるのをやめ、雰囲気ガラリと変わり、眼光が鋭く米倉総理を見据える。

その変化を肯定と捉えたのか米倉総理は少し満足げに話を続ける。

「二〇〇六年、京都連続殺人事件。麻薬常習者による乱交パーティー。二〇〇七年、精神異常者による人食い事件。その他、数十件。

……君が関与していたと思われる事件が多数ある。どれも犯人は意味不明なことを叫び、超人がいるようなことを口に出している。」

そこまで言うとなら米倉総理は立ち上がってお茶を入れると璃華に差し出した。

「君は……人の記憶を消すことが出来るね？　それだけじゃないみたいだが……。違うかね？」

その言葉に璃華は立ち上がって目の前に座る四人を冷たく見下ろした。

「ご心配なく、貴方方の記憶も消させていただきますから。」

そう言った璃華を見上げて米倉総理は苦笑した。

「それはまず、私達の話聞いてから判断しても遅くは無いだろ？　それに、我々は君には勝てない。」

「……………」

一瞬考え、確かにと璃華は座り直し、それを見た米倉総理は続け

た。

「我々として、君のような存在がいることを信じ、納得して受け入れるまでとてつもなく時間がかかったのはいうまでもない。だが、いつまでも目を逸らしていられる事象でもない。我々が知る限りでは、君だけだ。だが、一人いるとすれば、他にもいる可能性もある。」
肩を竦めつつ、米倉総理はお茶を一口啜る。

「よって、警視庁の刑事部に、新しく超特殊事例捜査課を設けることにした。英名はESP課、通称エスプ。意味は、文字通りだ。だが、この課が存在していることを知っているのは今現在この場にいますメンバーと後一人。もちろん、君にその課に入ってもらいたいと思っている。どうかね？」

「……納得のいく説明は？」

眼を細めてそう言った璃華に米倉総理は楽しそうに笑うと口を開いた。

「単純なことだ。ESP能力を使った犯行、または“普通”では起こりえない事柄に対して対処できるのは“普通”ではないESP能力を持った人間だからだ。もちろん、そういったESP能力者である君や他にいるだろう人達を監視下に置くという目的もある。特に君は今まで痛感したことが何度もあるのではないかな？ “力”の使い方次第では“化け物”にでも“悪”にでも変わりやすいのだと例え、使った本人に悪意の欠片も無い場合でも。」

率直にそう述べた米倉総理に璃華はほんの少し視線を和らげた。

“普通”ではない“私”を監視下に置くことで、“私”のような存在の危険性を減少し、尚且つ、“普通”ではない事柄に対しての“捜査”をさせようってことか。

「…分かりました。」

その返答に米倉総理を含め四人は安心したようにホッと胸を撫で下ろし、ソファの横から小さなケースを取り上げ、次々に目の前のテーブルに中身を並べ始めた。その品の数々を見て、璃華はため息を吐きたくなった。

これだけのものを用意するのに時間がかかっただろう。しかも、あらかじめ作っておいたということは、璃華が特殊事例捜査課に入っていることを『是』とすることを想定していたらしい。

全く…。

「まず君に常時所持してもらいたいののが、この手帳とブレスレッドとこの超ミニ型の特殊イヤホンマイクだ。手帳の中身には特殊事例捜査課用にデザインさせた立体型のカラーエンブレムが付いている。次にこのブレスレッドは、君が“力”を使った時間を記録し、“力”が発動した時点で衛星が君の姿を捉えて映し、こちらからも状況を把握できるようになっている。最後にこのイヤホンマイクだが、“仕事”または“力”を使う時につけてくれるだけでいい。その時点の担当者と話が出来るようにしてある。」

それらの説明が終わると璃華は視線をほんの少しずらした。

「これは？」

「いわゆる制服だな。この銀の仮面は、もちろん君の顔を隠す役割もしているが、“普通”でない“力”を使うのだから、“普通”には存在しない“架空”の登場人物でなければならない。そういうことだ。この制服を創った人物はガンダムとかマトリックス好きでな。こういうデザインになったんだ。ま、どちらにしろ。うまい具合に“非現実”を演出してくれるのは間違いない。」

その説明を耳に入れながらもその制服とやらを見下ろした。マトリックスに出てきたような黒いロングコートに、中はスパイ映画とか軍服とかをイメージしたような服で下はスカートにニーハイブーツ。コートの中身だけ見れば、ある意味本当にガンダムで使われるようなデザインの衣装に見えなくも無い。全体的に黒基準だ。最後につや消しされた銀の仮面。丁度、顔を斜めに横断するように左半分が隠れる。

「事ある毎にこれに着替えなくちゃならないの？」

敬語も忘れてそう呟くと米倉総理は苦笑した。

“非現実”であるからこそ、存在しない“人物”を演出しなければ

ば、流石の我々も君を庇えなくなる。」

米倉総理はそう説明しながら手帳とブレスレッドのみをその場に
残し、あとは専用の小さな鞆に入れて璃華に手渡してきた。璃華は
それを受け取り、テーブルの上に置きっぱなしだったブレスレッド
を左手に付け、手帳を胸ポケットへしまった。

「さて、君に特に制約というものはない。基本的に自由に動き回っ
てくれればいい。ただし、こちらの要請には必ず従い、仕事が始ま
れば、一日に一回は報告を入れること。それだけだ。あー、あと一
応報酬も用意している。その辺の説明はこれを。」

そういいながら、米倉総理は銀行の通帳とカード、そして、一枚
の紙を差し出した。

それを受け取り、さらっと読むと、事件の内容ごとに金額が違ふ
ことと、月給というわけではなく、事件毎のお支払いで捜査費も一緒
に振り込まれる。ついでに領収書は必ず、らしい。

まあ…、高校生には過ぎた金額になりそうだけどね…。

「分かりました。」

そう言って立ち上がった璃華に米倉総理はまた言葉を続け
た。

「今日は各県警察本部長全員が集まっていてその説明をすること
になっている。よって、君はその衣装を着て登場してくれればいい
いな?」

一応疑問系の形をとっているのにも関わらず、有無を言わさぬ力
を込めた言葉に璃華は内心呆れながらも素直に頷いた。

米倉総理の言葉からすると各県の警察本部が集まっているのは、
それに関しての説明のみだと伺える。

抜け目ないな…。

「では、説明が終わるまで柊博士ひいらぎの元で検査を受けていてくれ。」
その言葉と同時に部屋のドアがバンツと開かれた。入ってきた人
物は真っ直ぐに米倉総理を向く。

「米倉総理、例の子が来たんですか?!」

「ぴったりだ。」

その乱入者の様子に驚きつつ璃華は米倉総理が腕時計を見てポツリ、と呟いた言葉に片眉を上げる。そして呟きを聞いていなかったであろう乱入者は璃華に視線を移すと満面の笑みを浮かべた。

「よろしく、私は柊秀一だ。君の道具なんかはすべて俺が作ったんだ。要望があれば、なんでも創るからな！」

そう意気込んで喋り始めた柊博士に米倉総理は手近においてあった雑誌を投げつけた。

「次は、彼女の検査だ。即終わらせ、大会議室まで連れて来なさい。」

顔面に直撃した雑誌を掴み柊博士はあはは、と苦笑して璃華を促した。璃華は米倉総理達四人を一瞥してからその後が続いて部屋を出る。

先を歩く柊博士は鼻歌を歌いながら、どんどん地下へ向かっている。しかも、隠し扉のようなところをいくつも抜けて。

呆れた…。一体、警察は何やってんの？

たどり着いた先は、何かの実験室のようにも見え、またちゃんとした検査室に見えなくも無い。清潔感溢れる部屋だった。

「さて、これから検査も行うが調査も行う。君の“力”についてだ。そんな変なことはいらない。ただ、言われたとおり“力”を使ってくればいいだけ。さ、あの部屋の中央に立って。」

指差されて方向を向いてみると全面強化硝子かどうかは分からないが、硝子に覆われた部屋だった。

言われたとおりその部屋に入り、中央に立つとスピーカーから柊博士の声が聞こえてきた。

『じゃ、まず宙に浮いてくれ。』

約四十分後。

漸く、調査やら検査やらの質問攻め等から解放されるとあの衣装に着替え、姿を消したまま柊博士の後についていく。

暫くして大会議室というプレートのかかっているドアの前に到着すると柊博士は振り返って何もない空間に顔を向けた。

それを見て、璃華は内心苦笑する。

そっちじゃなくてこっちなんだけど…。

「中に入って米倉総理が君を紹介した時点で姿を現すんだ。」

そう言って、返事を聞かずドアを開けると正面で説明している米倉総理達に近づいていく。

もちろん、集まっている人達の視線もそれとなくこちらに集まってきた。

米倉総理はチラッとこちらを見るもすぐに視線を戻した。その総理の隣に警視總監と警視庁長官が座っており、総理と同じように正面のいすに座って県警察本部長達を見ている。

説明しているのは、かわいそうに最年少でもある福總監の柴田氏だ。柴田氏は、スクリーンに映していた資料を消し、口を開いた。

「以上が、これからの概要です。質問はありますか？」

その一言に数本の手が上がり、柴田氏は端から聞いていった。

「そんな存在が本当にあるんでしょうか？確かに件の事件は不可解な解決をしてはおりますが…。」

「そうですね。私達も大分迷いましたから、気持ちはわかります。」

と、答えにもなっていない言葉を発して次を聞く。

「そんな非現実が通常にありえたとして、何故、秘匿ひとくするんです？」

その言葉に柴田氏は暫し、沈黙するも答えず、次を促す。

「私は信じられません。アメリカで超能力捜査官なんてものがあるのはTVで私も知っていますが、信じることなどできませんよ？見たわけでもないですし。」

「…そのとおりですね。」

困ったように苦笑を浮かべる柴田氏に各県警察本部の長達は一様に不信な表情をうかべている。その状況に見かねたのか米倉総理が

立ち上がると一言。

「紹介しよう。特殊事例捜査課の職員である、綾瀬璃華さんだ。」

【Fly. Transparency. Release.】

そう呟き、体を浮かし、姿を現す。

会議室の中の職員は全員驚愕に眼を見開き璃華の姿を視線で追う。璃華はその視線達を一身に浴びながら、宙を飛び米倉総理の横に降り立つ。

髪型や髪の色、髪の長さが変わった璃華に驚きもせず米倉総理は言葉を口にした。

「質問の答えは彼女が答えてくれる。」

そのふりに璃華はため息を吐くと、最初の質問を投げかけたおじ様へと向き直る。

【Float. And Summons.】

ゆっくりと言う。

「っ?!」

おじ様の体がふわりと浮き、それを確認して璃華は指を鳴らす。パツとおじ様が消え、周りの人たちはガタガタと立ち上がる。

「瞬間移動の感想を聞こうか？」

という、総理の言葉に全員の視線が戻る。

そこには、呆然としたおじ様が立っていた。

「…あ…いや…信じます。」

そう言って席に戻ったのを見送って、璃華は次に何故秘匿するのかと聞いた人に向き直る。

「人は目の前に“異常”があると恐れ、己の持つ“普通”が崩れるのを厭う。そして、力の均衡を大きく崩す存在は、不和を呼ぶ。それに、誰がなんと言おうと私は“人”であり、人間。“非現実”は“非現実”であるままのほうが人は平静を保てる。」

その言葉にシン、と静まり返る室内に璃華は小さく苦笑を漏らし、視線を集める。

「現にあなた方は私を恐れて無意識に排除しようとしている。」

息を呑む声が聞こえ、璃華は最後の質問を投げかけた人に目を向ける。

「何を思いました？」

逆に璃華に質問されてギョツとしつつ、その人物は口を開く。

「異常な現象を見はしたが、信じられない。……つなにを？…そんな。」

「異常な現象を見はしたが、信じられない。……つなにを？…そんな。」

「dynabook……。五月二日午前六時十三分。アンドロイド。…ヒューマン。」

「dynabook……。五月二日午前六時十三分。アンドロイド。…ヒューマン。」

同時に発せられる璃華の言葉に当人は関係のない単語まで並べてやがて沈黙した。

「：貴方は昨夜、東京に来ることは滅多にないことだと、歌舞伎町に行かれたようですね。暇があれば、この後も行くつもりだったようですが…。あー…あと、昨夜食べた腐っていそうな料理、あれ腐ってますよ。そういう料理ですが。残念なことに耐性がないようでお腹が痛くなると思いますのでこの後、薬を買うことをお勧めします。」

そうやってやると、かの御仁は、真っ青になって腹を押さえた。

米倉総理は思いつき苦笑の表情で一歩前に出ると全員に向かって切り出した。

「特殊事例の事件で手に負えないというモノがあった場合、警視総監に連絡すること。彼女が、貴方方に要求したことは全て協力すること。特殊事例捜査課のことを他言することは許さない。やむ終えない場合は、二人まで許可をする。但し、これも警視総監に許可を求めるように。最悪、彼女の手によって記憶を抹消され、訳の分からぬうちにクビになるかもしれないから、気をつけてくれ。あとは、全てその資料の上に記載してある。読み終わり次第、資料をその場

において各々帰ってよろしい。以上だ。」

米倉総理はそう言うのと柊博士と璃華だけをつれてその部屋を出た。璃華は己の能力を使って瞬時にその衣装と制服、髪型を取り替えた。

その光景に米倉総理は何回か瞬きをすると微笑んだ。

「さて、これから君に手がけてもらいたい事件がある。そのうち警視総監より連絡が来るだろうから、それまで待つように。では。」

そう言って米倉総理と柊博士は璃華に背を向けて去っていき、それを見送って璃華も警視庁を出た。

———：警視庁刑事部超特殊事例捜査課、始動。

S i g n a l o f s t a r t . (後書き)

駆けだし…大丈夫？汗

The first contact.

ったく。なんでよりによって一番面倒な警部に昇進しちゃったんだよ。

そう思いながらも書類をちんたらと片付けていると目の前に紙を差し出され、取り上げて読むとバツと立ち上がった。

「…例の連続殺人事件のか？」

「そうです。」

にべも無く即答した目の前の人物に眼にかかる髪をかき上げながらため息を吐いた。

「分かった。皆に今、担当している事件全て他の課に回し、すぐに取り掛かれと伝えてくれ。」

その言葉にのんびりとした課の内部が一気に騒がしくなり、その様子を見回して一人ごちる。

ふざけんなよ。定時なのに帰ろうにも帰れない状況を押し付けやがって上の連中。

そう思いながらも、そんなことは表情に出さず、のんびりとしていた先ほどとは違ってテキパキと書類をかたしていく。

「柏木警部！」

突如、大声で呼ばれ、その急いた声色とは逆にゆっくりと顔を上げると先を促すように眼を細めた。

「被害者が出ました！」

その言葉に反射的に立ち上がるとコートを手に取り、当たり前の言葉を命令として口に出す。

「行くぞ！」

部下の用意したパトカーに乗り込むと柏木警部は小さくため息を吐いた。

ったく、よりによって今日かよ。

なにしろ、警部に昇進して二日目ですれを狙ったかのような慌しさなのだ。

柏木警部は白手袋をはめて助手席に座る部下が状況説明してくれるのを聞いているとやがてパトカーは現場へ到着した。部下が、慌てて手袋をはめているのを無視し、一人先に車を降りた。

タンツ。

軽い地面を踏む音と共に目の前に黒い布が目の前に舞い降りた。

そう思った次の瞬間、自分の足元に黒のロングコートに身を包み、顔の半分を隠すように銀の仮面を被っている人物が着地した姿勢でそこに存在していた。そして、眼が合う。

髪も眼も服も全て黒ゆえにその中で唯一肌の出ている箇所、半分は銀のマスクに隠れていたが、それでも整っていると分かる顔が引き立てられる。

「柏木警部？」

その呼びかけにその人物の眼が紅くなったと思った次の瞬間、その人物は地面を蹴り、人間離れした跳躍でもってその場から去って行った。

その瞬間、チラリ、とその人物が左手につけているブレスレットの文字が見えた。

見えたが、しかし、と首をひねる。

なんなんだ、今の。疲れてんのか？ 俺。

「警部？」

「あ、ああ。今行く。」

一瞬の出来事を疑問に思いつつも頭を切り替えて現場に走って近づくとはいきり顔をしかめた。

ついさっきまで、生きていたとは思えないほど、カラカラに干からびてミイラのような死体。しかも全裸。しかも、直ぐ脇には脱ぎ捨てられた制服と学生鞆。

「…写真より酷いな。」

その眩きに反応するかのように斜め後方から情報が発せられる。

「被害者は夜斗高校2年生、小林友香。死体発見より十五分前に目撃されたのが最後です。」

その言われた内容に眉をひそめると情報を口にした人物を振り返る。

「十五分だと？」

「ええ。被害者の友人二名が帰り道で分かれたとのことですよ。」

その返事を聞きながら被害者の傍にしゃがみ込んで、手袋をはめたまま死体に触れてみる。

布越しでも十分ガサガサと乾ききっていると分かる死体の感触に顔をしかめる。まるで乾燥した糸瓜のようだ。

「たった十五分でここまで出来ると思うか？」

「……少なくとも私には無理です。そういえば、今回は前の事件よりちょっと変化がありましたよ。死体を発見した時にここで女性が目撃されています。もちろん、被害者じゃなく全身真っ黒の女性です。目撃者によると死体を調べるかのように触っていたと。」

その言葉にさっきの光景を思い出した。

まさか、な。

「そうか。どちらにしろ、そいつについて明日から聞き込みだな。」

日もすっかり落ちて真っ暗になった夜道をてくてくと歩きながら、ふと月を見上げた。

ニュースにもなっている連続殺人。

謎の短時間ミイラ化事件、ねえ。早速って感じ。でも、どう調べようか。第一、データもらっても学生だから、すぐには無理だし。

なんて内心で愚痴ってみて、はあ、とため息を零してみるも、今まで同じ条件でやってきたのだ。しかも、今回からは警察の情報も筒抜けで以前よりか格段にやりやすい。それに今回の事件の内容は過去関わったモノに似たような事があったので、ある程度の検討も

っている。

先に視線を向けると女子高生の三人組が見え、その内の一人が暗い路地に入っていくのが伺えた。

“普通”の女子高生か…。

漸く、あの女子高生達の分かれた所にたどり着くとふ、と周りの空気がザワツと騒いだのを感じて路地に足を向ける。

五分も歩かないうちに変わり果てた姿で道路に横たわっているモノを発見し、固まった。

何も纏っていないソレは、異様に干からびて元がどんな人であったか全くわからない。

【Change】

すぐに我を取り戻すと璃華はそう呟き、高校の制服を仕事用の制服に一瞬で変える。

死体の傍にしゃがみ込むと微かに血の匂いが鼻孔を掠めた。

もしやと思って死体に手を伸ばしかけたが、要らぬ証拠を作ってしまったのは元も子もないので、手を引っこめる。

【Float. And, it rorates.】

フワツと死体が僅かに浮き、ゆっくりと回転する。その首筋に視線をやると、予想していたものが見えた。

「…：ビンゴ。」

そう呟いた瞬間、死体の回転が止まり、視線の先には二つの所謂吸血痕というものがあつた。死体をそつと地面に横たえるとこれまた“力”でもって傍に置いてあつた学生鞆を浮かせて開け、中身を宙に浮かせて一つひとつ、調べていく。

「夜斗高校2年4組、小林友香、か。さっきの女子高生だったわけか。」

わからなかった、と言外に含ませて言うのと鞆やその中身を元のよに戻し、死体を観察する。

確かに干からびてはいるが、目、髪の毛、歯、爪などは十分と潤っていてついさっきまで、生きていたことを訴えている。

【Inquiry Feelings.】

そっと手をかざし、この辺りに残っているであろう残留思念を読み取るが、読み取れるのは死への恐怖ではなく、恍惚とした感覚のみだった。

これで、格段に可能性があがった。

死体にかざしていた手を離すと視界の隅に人影を感じて璃華が顔を上げると慌てて走り去っていったそれに顔をしかめる。

「ヤベ…。目撃されちゃった。第一発見者に。」

そう呟くとイヤホンから即座に答えが帰ってきた。

『警察に見つからなければ、目撃されてもかまわんが?』

この言葉に眉間に皺がよるが、視線でさっきの目撃者がいなくなっているのを確認する。

「いや、私が犯人にされるのだけは勘弁してほしいね。【Fly】」

地面を蹴り、風の精霊に力を借りて高いビルの屋上へと飛び乗る。

『こちらからの情報だが、この事件に関して担当が替わったらしい。』

「で?」

言いながら、現場を見下ろすとパトカーが既に何台も到着し、手際よく現場を調べていく。そして、警官の一人が目撃者から話を聞きだしているのに目を向ける。

『柏木紀一警部。23歳。超エリート警部だ。』

「随分とお若い。ちっ、目撃者が私のこと言ったし。最悪。」

『どうせ、分からないんだ。放っておきなさい。それより、君の持っている情報よりいいものを聞けないようだったら、さっさとその場を離れないとやっかいなことになるぞ。』

「ん。」

璃華は立ち上がると現場とは正反対の方へ向かって走り、下を確認しないままビルから飛び降りた。地面につく直前に身体を少し浮かせて衝撃を和らげ、顔を上げて固まった。今、まさに車、もとい、パトカーから降りてきました風な人物を見上げたまま、璃華は思考

をめぐらせる。

どうしよう。パトカーの中にいる人達はこっちに気づいてないよ
うだけど。

「柏木警部？」

その声を期に璃華は小さく呟き“力”を発動させて地面を蹴った。
一気に跳躍してそのまま宙に浮き上がり、姿を消すとそのまま飛ん
で近くの人気の無い場所に降り立った。

『……言った傍からコレか。』

「うっさい。爺。」

『それは酷すぎじゃないかね？』

「全然。それに、見られても幻覚とか妄想とか思うだけ。」

『……兎も角、さっきの男が柏木警部だ。で？　　どういう状況だっ
たんだ？』

話を促す声に頷きつつ、自分の格好を元の女子校の制服に戻すと
鞆を肩にかけ、携帯を耳に押し当てて歩き出す。そうでもないかと
周囲の視線が痛くなるのは必至だからだ。

「被害者をK、その友人をYで話すね。私は、そのKさんとYさん
二人の計三人の約300M離れた後ろを歩いてたんだけど、途中で
KさんがYさん達と離れて路地入ってっちゃったんだよ。んで、空
気が騒いでたから、路地入ってくと昇天された後だったって訳。K
さんが路地に入って約七・八分で私が発見。そうだなあ。見たところ、死への恐怖という感情の残滓はこれっぽっちも残ってなかった。
変わりに残ってたのは恍惚とした感情のみ。ああ、それから吸血痕
みたいなのが首筋にあったよ。後は、そっちからもらった情報どお
り、髪の毛とか目、歯、爪は潤ったままだし、なぜか裸だった。以
上、報告終了。」

『分かった。じゃ、寄り道せずに気をつけて帰りなさい。』

「はいはい。」

携帯を下ろすとイヤホンマイクと共に鞆にしまい、己の家へ向か
って歩き出す。

The first contact.

(後書き)

今回はちょっと短め。。。。

Investigation start.

翌日。

「ねえ、君ちよつと時間いいかな？」

かけられた声に振り返って璃華^{りか}は怯えたような表情を浮かべ、相手はそれを見て苦笑を漏らした。

「まいったな…。ナンパの類じゃないし、一応これでも警部でね…
…ってそうじゃなくて、聞き込みをしてるんだが、少しいいかな？」
「はい…。」

その返答に少し苦笑気味に話を切り出した相手を見て璃華はため息を吐きたくなった。

何で警部直々に聞き込みしてんの？ いや…警部だからこそしてんかな…？

あの事件直後から、警察の聞き込みが早速始まることは聞いていたが、璃華の在校する学校付近まで聞き込みに来ているとは、大分、捜査範囲が広いと見える。

「ここ最近このあたりで全身真っ黒な女性を見かけることはあるかな？」

「……冬だから全身真っ黒なんて人いっぱいいますけど？」

尤もな答えに警部は苦笑して二枚、紙を取り出した。

全身像と顔を大きく描いたものが目の前に掲げられて璃華はそれを見て眉間にしわを寄せ、首を捻った。

「見たことないですよ。第一、そんな怪しい人いたら、即行警察に連絡が行くと思いますけど。」

顔の方の絵を指差してそう言う警部は一瞬、苦笑して固まった。何事か、とさつと視線を辿るとブレスレッドに行き着いたので璃華は背中に変な冷や汗をかきながらも、その視線に気付かぬといった様子を貫き、警部を見て首を傾げてみせる。

「あのー…、もういいですか？」

「あ、ああ。すまなかったね。ご協力ありがとう。」

ブレスレッドを注視しながらそういった警部に背を向けて、自転車に跨ると家に向かって漕ぎ出す。

柏木警部の視線を背中に感じながら璃華は小さくため息を吐いた。

アノ絵…、思いつきり、捜査中の格好。顔も仮面まで。それになんであの警部はブレスレッドを見てた？ あの一瞬で見られた？

そう思いながら己の左手を見下ろした。

まー、簡単にたどりつけるわけもないし…。さて、と。現場へ行くか。

家の前で自転車を止めると玄関を鍵で開けて入り、リビングのテーブルの上に置手紙を残すとまた家を出て今度は図書館へと向かった。

図書館に着くと、真っ直ぐに化粧室へ向かい、化粧室に誰もいないことを確認するとクセのあるブラウンの髪の毛を外し、本来のストリートで長い黒髪を下ろす。その開放感に思わず、息が漏れる。

「……さて、と。」

櫛で髪を梳きながら、もう一着の捜査用の制服に着替える。

こちらは、どこの学校の制服でもないが女子高生の制服だ。

所謂、なんちゃって制服。

まあ、今時珍しくもないからいいけど。これはこれで動きやすいし…。でも、なんで捜査用の制服が女子高生なの？ これもあの柊博士の趣味？

脱いだ制服やカツラをしまつて図書館を出るとまた自転車に跨って、昨日の現場へと走らせる。その途中、花屋で花を買った。

現場近くで自転車を降りて路地に入ると泣いている男子高校生すれ違った。

被害者の彼氏かな、と無粋な憶測を立てるも反射的にその男子高校生の制服をみやる。

別の高校か…。友達か彼氏か…。

そう考えつつも視線を正面へと戻す。

現場に近づくとすでに花束がいくつか置かれていた。それにも加えると張られているテープを跨いで被害者が転がっていた場所に近い。

それにしても、吸血痕か…。

顎に手を当てつつ、唸る。

「おい。そこで何やってる？」

突然かけられた声に璃華が振り返るとそこにはあの警部が花束を片手に持ったままこちらを睨んでいた。

「……別に。」

ほとんど無表情でそう言った璃華に警部はポケットから警察手帳を取り出した。

「柏木紀一。一応警部だ。で？　なぜ君は私たちが誰も入らないようにと張ったテープの中になぜ立っているんだ？」

聞く権利があると言わんばかりの柏木に璃華は肩をすくめた。

「趣味。」

そっけなく返された返答に柏木は思いつきり眉をひそめた。

「趣味？」

「何か問題でも？　個人の趣味まで一々注意するの？　警察は。」

「問題を摩り替えるな。俺は、なぜ君がテープ内に侵入しているかを聞いているんだ。」

その正論に璃華は口を噤むと素直にテープ内から出てため息を漏らし、頭を下げた。

「そうだね。確かにそれは私が悪い。ごめんなさい。」

「……君は、被害者の知り合いか？」

その問いかけに頭を上げると苦笑して首を横に振る。

「違う。ところで、警部さんはなんで花束なんか？」

「…被害者が俺の親戚の子供だったんだ。」

その言葉に璃華は一瞬目を細めた。

「ふーん？　その被害者って彼氏でもいたのかな？」

「なぜ？」

「さっき、泣いている男子高生と入れ違いになったから。」

そう言って顔をテープの中に向けて黙り込むも、隣の気配が動かないことに気づく。

「なあ、君名前は？」

問われた声に顔を戻すと首をかしげてみせる。

「警部さんがナンパ？ 駄目でしょ？」

クスクス、と笑みを零しながらそう言って璃華はその場から離れた。路地を出てすぐ右に曲がると携帯を取り出し、警視総監、もとい、下野崎の番号を押した。

『問題か？』

「あのねえ、下ちゃん。最初にソレ言う？ 普通？」

そう言いながらチラリと路地が続く道を見遣り、その壁を透視してみる。そこに柏木が立っていることがわかったと小さくため息を吐いた。

『…で？』

「ディスプレイで例のヤツ、見て欲しいんだけど。」

『…君の周辺をか？』

何かを察したようにそう答えた下野崎に璃華は察しがいいと口角を微かに上げる。

「そ。」

『……目をつけられたのか？』

「いや、それはない。」

『…なら、現場を調査したら、遭遇したってことか？』

「さっすが下ちゃん。頭いい。」

『で？ 用があったんだろう？』

「彼氏がねえ。怪しいかも、なあんてね？」

『被害者の彼氏を調べると？』

「うん。ちょっと疑問に思ったことがあって。」

『分かった。君が、被害者の彼氏と想定したヤツが怪しいんだな？』

「……それはまだわかんない。私もちよつと探りいれてみるけど。」
『そうか。とにかく、柏木警部には十分に気をつけなさい。』

「了解。んじゃ。」

そう言って電話を切ると足音を立てずに路地の方へ向かった。

当然、そこで聞き耳立ててた警部と目が合う。今、気がついたふりをしつつ璃華は物凄く不機嫌な表情をつくる。

「警部が盗み聞き？ 最低。」

そう言々と柏木が何かを言う前に自転車に乗り込んで、その場を去る。

そろそろ、あいつんとこ行かなくちゃ……。あ……。でも、あいつのところ行ったら……。あ……。今日は止めておこう。せめて肉食ってか
らにしないと。

二日後。

「いつ見ても外と中のギャップには慣れない。」

そう言いながら、無遠慮に周囲をキョロキョロと見ているとその視線を遮るようにスラッとしたキレイな白い手が璃華の頬に触れて顔を正面に戻した。

「話があるんだろう？」

そう言われ目の前に立つモデル並みにかっこいい男を見る。

黒髪でブルーアイズ。そんじょそこらにはいない、超美青年だ。

璃華は視線を遮られ、顔の位置を修正されて少し不機嫌になりながら口を開いた。

「まあね。てか、見るぐらいいいじゃん。減るもんじゃなし。」

「……………」

無言で方眉を上げた男に璃華はハイハイ、と渋々ながらに言い、ソファに座って真っ直ぐ男を見る。

「わあかったって。ヴェラだけ見てればいいんでしょ？」

そう言った璃華を一瞥すると紅茶を入れてテーブルの上を滑らせ、自分も紅茶を口に含み、一呼吸置いた後、ヴェラは問う。

「で？」

「……ニュースで聞いていると思うんだけど、短時間で体内全ての血が吸い取られて、ミイラのようになっちゃうヤツ。まさか、ここら辺でいないよね？」

上目遣いで見てくる璃華を見て、不愉快極まりないというように顔をしかめ、ヴェラは淡々と言う。

「我がヴァンパイア一族は、もう無闇に人を襲わないと誓ったはずだ。ここ日本に封印されているヴァンパイアも居ない。すでに全部処分済みだ。」

「……じゃあ、なんで？ “普通” の人間が血を抜いたとしても、あも干からびるはずないし……。」

「持ち込んできたんじゃないか？」

「持ち込む？」

繰り返して眉をひそめた璃華をチラッと見遣って男は一言。

「私が管理しているのはこの日本という島国一つだけだ。」

「……つまり、外国のヴァンパイアに咬まれた人間がヴァンパイア化してるって？」

「……在り得ない事ではない。人間ですら、“原始” に近い生活をしている者がいるんだ。古のヴァンパイアと同様に“人”を襲って食すのが普通のヴァンパイアもいたっておかしくはない。それに、咬まれた人間がヴァンパイア化して、月一以上の頻度で襲っていて私ですら気配を感じ取れないとなると……LEVEL“S” 辺りが打倒だな。……来てるぞ。日本に。」

その言葉を聞くなり頭を抱え込んで璃華小さく唸った。

古のヴァンパイアほど、厄介なものはない。“凶暴性” も高く、古のヴァンパイアは殆ど“純血”だ。“力”もさることながら“プライド”も高い。目の前の混血種のヴァンパイアですら、昔戦った

時は相当やばかった。

「…ねえ…。」

「……先に言っておくが、LEVEL“S”は、ヴァンパイア化を促したヴァンパイアにしか居場所は分らない。他のヴァンパイアは近くに来て初めて分かる程度だ。」

聞く前に答えられてますます、璃華は頭を抱えるがすぐに脱力したように顔を上げる。

「分かった。情報ありがとう。勘定は？」

「首、だな。」

その言葉に璃華は目を細めて男をみる。

「どちらにしろ、首じゃない。」

そう言いながらヴェラを見るとすでにヴェラの目はブルーアイズではなく、黄金色に変わっていた。

「……そこが体勢的に一番楽だ。なにより、一番吸い易い。」

そう言いながら、男は座っている璃華に近づいて、ソファに片膝を付くと璃華の首筋に顔を埋めて牙を刺した。

ズズ、と自分の血が吸い取られる音を間近に聞き、ゾクリと璃華の背筋が震えた。

暫くして、牙が抜かれるとヴェラはその周囲を舐め始めた。

「…あゝ…別に綺麗にしなくてもいいよ。」

その言葉に素直に顔を上げてヴェラはポツリ、と呟いた。

「もったいない。」

「……報酬は十分支払ったでしょ？」

呆れたようにいう璃華の頬にヴェラはキスを落とすとスツと離れた。

「もし、危なくなったらすぐに言え。今回は、無償で力を貸してやる。相手が相手だからな。」

「ありがと。じゃあね。」

そう言って立ち上がるとヴェラの家を出て振り返る。

外からは、ごく普通の家なんだけどなあ…。

そう。ヴェラの家の中は、さながらヨーロッパのどこぞの貴族の屋敷がごとく広くバロック調なのだ。しかも、物凄く暗い。空間が歪められている事は間違いない。

突然、携帯が鳴った。

「はい。」

『さっきのは一体なんだ?』

その問いに璃華はため息を吐いた。

「私、力使ってないはずだけど?」

『…暇だったので君の捜査の様子を見てみようかとね。どういうわけか映像は映らなかったが、音声は大丈夫だったんだ。で?』

暇だったとのたもう下野崎に璃華は眉間が一瞬ピクリと震えるも、長いため息を零すにとどめた。

「聞いたまんまだよ。下ちゃん。アレは日本にいる全ヴァンパイアを管理しているヴェラってヴァンパイア。まあ、いうなれば、日本のヴァンパイアの王ってところだね。」

『…ヴァンパイアか。彼の言っていたことは信用できるのかね?』
心底その存在に驚いているという色を含ませつつ、問いかけてきた下野崎に璃華はにべもなく即答する。

「もちろん。彼は私に嘘はつけないから。」

『なぜ?』

「これ以上突っ込んだら、ヴェラの記憶消すよ。」

声色が低く硬くなった璃華の様子に下野崎はため息を吐いた。

『では、これだけは確認させてくれ。君と彼の関係は情報提供者と客だな?』

「あら、恋人だとも思ったわけ? ありえないから。」

苦笑しながらそう答えた璃華に下野崎はホッとしたように息をついて、電話を切った。

切れた携帯を見下ろして璃華は小さく舌打ちした。

確かにヴェラとの関係は恋人ではないが、主従という関係に近い。昔、ヴェラと戦って勝った暁にヴェラは璃華に嘘はつかないこと

と人を無闇に襲わないこと、そして、よっぽどな理由がない限り、言葉には従い付き添うと誓った。だが、璃華は付き添うというところだけは断固拒否した。その理由として挙げられるのは、まずヴェラが璃華に対してした誓いはほとんど主従の誓いであったことだ。

ヴァンパイアの本質は皆、気高く己より力のあるものに対しては喧嘩腰になるか敬意を表すかどちらかだ。ヴェラは前者でもあったがほとんど後者のような性格の持ち主。よって己の主と決めた相手がほんの少しの怪我でもしようなら、怪我をさせた相手を、命をかけてでも食い殺そうとするのだ。

ヴェラは絶対にそんなことはしないと断言してはいたが、プライドが高く主に対して忠実になりすぎるぐらい忠実になってしまいうヴァンパイアの性質を知っている璃華は良しとしなかったのだ。

洩々、ヴェラは折れたが変わりに絶対これは受け取れといって渡してきたのは、ヴェラの命の元でもある核だった。見た目は赤い石でヴェラのはその力に比例するがごとく直径二十五センチ以上はあった。普通のヴァンパイア、もとい、現代のヴァンパイアはもうほとんど卓球の玉ぐらいしかないのだ。ソレを見て璃華はヴェラに王か、と問うとしばらく時間を置いた後頷き、それを身体に押し付けろといってきたので言われたとおりにするとソレはスツと璃華の身体に吸い込まれるように入っていた。

それがまさしく主従の契約であった。

困ったことに、主従という関係を拒否したというのにあえて主従の誓約を唱えたヴァンパイア、ヴェラは確かに璃華の言ったとおり付き従うことはしなかったが、誓約や契約が主従のソレであったが為にたまに璃華がヴェラに会いに来なければならなくなった。

理由は簡単。核が長い間離れているとヴェラが弱ってしまうのだ。今回は血もやったし、少しは持つか……。ま、ヤバくなったら向こうから連絡くるから別にいいか。

そう結論付けると璃華は人の賑わう渋谷へと向かった。

あの男子高生を探しに。

それから数日、ずっと放課後は図書館で着替えて、渋谷でその男子高生を探すのに時間を費やした。

だが、最悪なことにヴェラの家から出て渋谷に着いた時、偶然、渋谷駅にいた柏木警部が自分を張り込みだしたのに気づいた。早めに気づいたから良かったものの少しでも遅ければ、あのおっとり璃華と現在の黒髪の璃華が同一人物だとすぐにバレただろう。

そして、毎回帰る前に柏木警部を撒いてから図書館に行き、着替えて家に帰った。

流石にそれが数日と続いた為、いい加減我慢の限界が来て、璃華は姿を消したまま警視庁に忍び込み、警視総監の部屋へ向かった。

ノックもせずドアを開けると下野崎は勝手に開いたドアの辺りを見てため息を吐いた。

「どうした？」

その問いにドアを閉めてから姿を現すと璃華は不機嫌極まりない表情を顔に貼り付けてソファに座る。

「あの目障りなエリート警部どうにかしてよ。」

「すまんが、それは無理だ。今の柏木警部に担当が替わった理由は、前の担当者が病気で入院したからに過ぎない。それに彼が担当を変わる理由はどこにもない。しかも、優秀だ。」

「……その優秀さ故にこちらがめっちゃくちゃ、やりにくいんですけど？」

「兎に角、今は我慢しなさい。そのうち嫌でもエスプの存在を知られることになる。だが、それは今ではないんだ。わかるね？」

渋々ながらに璃華が頷いたのを確認すると下野崎は思い出したように口を開いた。

「ああ、そういえば……実にいいタイミングで来てくれた。捜査に関してなんだが、事件解決後、犠牲者のご遺族に説明に行ってくれ。」

「はあ？」

「もちろん、あの手帳を見せて事件の全貌を説明するんだ。一応、ご家族の方にもエスプのことは口止めしておきなさい。それから、

まあ、ESP能力について信じない方も出てくるだろう。そうなった時は、相手に被害者のことと共に記憶を消すか、話の内容を信じて忘れないでいるか、を選ばせない。以上だ。」

しばらくその内容を頭の中で繰り返し続けたのち下野崎を見上げる。

「つまり、エスプの存在が“警察”に知られていないうちは、“事件解決”のことはご遺族だけに知らせると？」

「そうなる。まあ、そのうち君の存在は都市伝説のようになり、状況によってはその他大勢に目撃され、ついに雑誌の記者達に追い回さるだろうから、その後だな。」

それを聞いた璃華は半眼で下野崎を見る。

「物凄く笑えないリアルなご説明どうも。」

そう言って立ち上がると呼び止められ、璃華は振り返った。

「今日も例の男子高生を探しに行くのかね？」

「そのつもり。じゃあね。」

そう言った途端、姿を消すとそのまま警視庁を出て、渋谷へと向かう。そして姿を現してもっとも人通りの多いハチ公前へと向かう。周りの女子高生同様階段に座ると携帯をいじるフリをしながら、道行く人を見た。ふ、と見覚えのある顔を見つけ、璃華は反射的に立ち上がるとそちらに近づいて確認する。

ビンゴ。

スツと視線を落とすと制服を見て口角を微かに上げる。

「ほうすい峰水高校か……」

そう呟いて璃華はクルッと踵を返した。その時、視界の端に柏木警部の姿を捕らえ、ため息を吐くと撒くために町を歩き出した。

いつものように少女の姿を見つけ柏木は離れた位置からその様子を伺った。

突然、立ち上がり歩き出したので慌てて付いて行くとその横顔が微かに微笑んだのを捉え、視線の先を辿ると男子高生がいた。

なんだ？

疑問に思いながらも急に歩き出した璃華を追うが、これまたいつものように撒かれ、渋々、先ほどの男子高生を探し、聞き込みを装って声をかける。

「ちよつと聞きたいことがあるんだがいいかな？」

「ああ。」

その返答に紙を二枚出して渡す。

「こういう女性見たことある？」

「ない。で？ この人がなんなわけ？」

「……容疑者かな……。とりあえずは。確定じゃないけどね。」

「ふーん？」

そう言ってジロジロと眺め回してくる男子高生に柏木は苦笑を零す。

「それじゃ、ご協力ありがとう。」

そう言って離れ、しばらくすると柏木は小さく呟いた。

「峰水高校か……」

I n v e s t i g a t i o n s t a r t . (後書き)

柏木警部…ストーカー？汗

The first conversation.

「じゃあ、また明日ねえ。」

「おう。」

目の前を通り過ぎていく峰水の生徒達を眺めながら、その生徒達の視線が自分を向いているのに気づくが、ここはあえて無視。

ここまで来たのは良かったけど、会って引き止めてどうしましうかね…。考えてなかったわ。

そう思っただう話を持っていこうかと思案していると目的の人物が現れ、璃華はゆっくりと近づいた。

「あの…。」

声をかけるとその人物を含め、その友人らが振り返った。

「何、この子？ 知り合い？」

「知らね。で？ 何？」

結構淡泊な反応に内心苦笑しながらも、表面上、頬を赤くして上目遣いで見る。

「…あの…少し、お時間いただけないでしょうか？」

その璃華の言葉に周りが囁し立て始め、目的の人物は不機嫌極まりない表情で璃華の腕を掴んでスタスタと歩き始めた。

「あ、あの…？」

「いいから付いて来いよ。あんなところじゃ注目されるだけだろ？」

「はい。」

大人しく腕を掴まれたまま連れて行かれたのは小さな喫茶店だった。

その人物は座った途端、促した。

う…ん。アノ展開から考えると告白って方向が一番違和感ないか…。

「あの…突然なんです、好きです。付き合ってください。」

そう言っって顔を上げると目の前の人物は、微かに顔色を悪くして

視線をさまよわせていた。

「っ悪いけど、今誰とも付き合う気ねえから。」

その様子に疑問を感じ一瞬、眼を細めるがそのまま眼を瞑って小さく微笑んだ。

「いえ、こちらこそ、こんなことにお付き合いさせてしまって申し訳ありませんでした。では。」

「あ、ああ。」

その返事を聞くなり、スツと伝票を持ち去って会計を済ませ、店員に彼の分は支払ったと伝えて店を出る。

なんで？ 明らかにあれは怯えてた。

そう思いつつ、喫茶店の中に視線を向けるとさっきの男子高生が更に顔色を真っ青にして携帯を取り出した。

その男子高生の口元を注視する。

“母さん。ヤバイ。明日はアレの日なのに。告白されちゃった。：あ、ああ。……………分かった。すぐ帰る。”

「おい。」

いきなり腕をつかまれて璃華は驚き、眼を見開くと目の前に居たのは厳しい表情を浮かべた柏木警部だった。

「：あ、あの時の警部さん？」

「そう。君に聞きたいことがある。」

硬い表情のまま、そう言ってきた柏木警部に璃華はまた変な冷や汗をかきながら首を傾げる。

「はあ。なんででしょう？」

「君は、なぜ、今日始めて知り合った彼に告白をした？」

「初めて会った人になんて告白してませんけど？」

不本意だという表情を浮かべるが已然柏木警部は、表情を変えずに畳み掛けるように問う。

「じゃあ、君が告白した相手の名前言えるか？」

「……………」

答えないでいると柏木警部は更に表情を厳しくさせた。

「それともう一つ。このブレスレッド。こんなブランドは存在しない。どこで買った？　もしくはどこでもらった？」

「……………」

「答えろ。」

涙みを利かせてきた柏木警部に璃華はうるっと眼に涙を浮かべて警部を睨み上げる。

「なんで、どこかの犯人みたいにアナタに問い詰められなきゃならないんですか？」

「答えろ。言わなきゃ、連続殺人事件の重要参考人として捕まえる。」

そう言った柏木警部に璃華は身をよじって暴れ、その時にエスプの手帳がポケットから落ちた。

柏木警部がそれに気づき、持ち上げようとしたので璃華は、おっとり璃華がやっていると設定した合気道で柏木警部を投げ飛ばし、手帳を拾うとポケットにしまって投げ飛ばされて呻いている柏木警部に近づいた。

「連続殺人？　ふざけないで！」

そう吐き捨てるように言うと言部は背を向けてその場を立ち去った。

一方、柏木警部は固いアスファルトに打ち付けた痛さに顔をしかめながら、その後姿を見遣る。

なぜ、女子高生が警視庁の手帳を持ってる？　第一、彼女の養父は雑誌の編集社に勤めてるはずだ。

次の日の放課後。

まったく。なんで今度はこっちの“私”をつけて来てんの？　やり辛かったらありゃしない。

そう思いながら麗と共に帰路を帰っていると麗が璃華を見下ろした。

「ねえ、あんた今日なんか機嫌悪くない？」

「うゝ…ん…。そうかなあ？」

「まあいいわ。んじゃ、私こっちだから。また明日ね。」

「はあい。ばいばあい。」

そう言って麗と別れを告げると璃華は家に真っ直ぐに帰り、またいつものように置手紙を置くとまた家をでて自転車に跨り、図書館を目指す。

図書館の中まではついてこないよね。

いつの間にか車に乗っている柏木警部にウンザリしながらも図書館に入り、警部がはっている入り口とは間逆の化粧室へ向かう。

いつものように瞬時に捜査用の姿に変え、銀の仮面をつけると化粧室の窓を開けて飛び降りた。

すっかり日も落ちて暗くなった空に姿を消す必要はないか、と宙に浮き、あの男子高校生の高校の校門を目指す。

一方、警部は車のミラーに写った光景に唖然と固まっていたが、やがてあの“超人”が動き出すと車をゆっくりと発進させてその後を追った。

まさかあの男子高生か？

そう柏崎警部が思っていると校門からあの男子高校生が出てきて、校門の上空、高い位置で止まっていた影が、その男子高校生と同じ方向へ少しずつ動いていくのが見て取れた。

「犯罪集団かなにかか？」

小さく呟かれた言葉は静かに空気に溶けこんだ。

男子高生は足早に真っ直ぐ家に帰った。

上空に腰掛けてその男子高生の部屋の中を除き見て璃華は一瞬固まった。

男子高生はベッドに自分の身体を縛り付けていたのだ。それだけならまだしも両親そろってそれを手伝っている。

よくよく見てみるとその親子の表情は何かに怯えているように真っ青だった。

微か口元に笑みを作り、璃華は呟いた。

「ビンゴ。」

そして、その両親が自分の子供をベッドに縛り付け終わると家から出ていき、一時間もすると突然、男子高生が暴れ始めた。その様子をよく注視し、瞳の色を見てみると、紫色に変色していた。

「ヴェラの予測どおりか……。やっかいな。でも、自覚症状がある上に、抵抗しようとしているって点ではまだマシ……か。」

そう呟きつつヴェラにメールを送っているとヴァンパイア化した男子高生は身体を拘束していた紐やら、鎖やらを引き千切ってベッドから起き上がった。それを見て、璃華は視線を落とす。

「……ヴァンパイアの力って意外に怪力だからね。拘束は無意味。」

男子高生が玄関から出てきたと思った次の瞬間、走り出した。

璃華は小さく舌打ちをするとその後を追っていく。

しばらく走っていた男子高生はすぐ暗い路地に入ってしまった。それを追って路地に入ってしまった璃華は驚愕に眼を見開いた。

道の向こう側から柏木警部が現れたからだ。

男子高生は真っ直ぐ柏木警部を見、油断しきった柏木は男子高生に話しかけたが、次の瞬間、男子高生は柏木警部の喉元に噛み付いていた。

「あんの、馬鹿！【Part】！！」

璃華は“力”を発動させて警部から男子高生を引き剥がすと男子高校生は吹っ飛んで壁に激突した。それに見向きもせず、首を押さえている柏木警部に近づくとその身体を力を使って浮き上げ、建物の屋上に飛び乗る。

突然のことに柏木警部が咂然と璃華を見ているがソレを無視し、璃華はいつのまにか路地に入り込んできた女性を襲っている男子高

生の様子を見て、苦々しい表情を浮かべると道に降りて近づき、引き剥がすと今度はそのまま“力”で動きを封じてその女性も警部と同じ場所へ移動させる。

その様子を見ていた柏木が突然呟いた。

「な……なんだ……？ あれは。」

その柏木警部を横目で見て一言。

「ヴァンパイアにヴァンパイア化させられ、操られている哀れな少年。」

答えられた言葉に信じられないという眼でこちらを見返してきた柏木警部を一瞥するだけに留め、もう一度道に降りた。

璃華の“力”によって動きを完全に封じられた男子高生は飢えた獣のように目をギラつかせ、こちらを睨んでいる。その頬には涙が伝っていた。

自我が起きてるのか……。可哀相に。

璃華は一度眼を伏せると人差し指を切って血を出させ、その指で男子高生の顔に字を書き始めた。

書き終わると瞬時に血が蒸発し字が消えうせ、正気を取り戻した男子高生が身体を小刻みに震わせながら崩れ落ちた。

「もう、大丈夫。少し、ここで待ってて。」

優しく問いかけ、男子高生が頷いたのを確認すると地面を蹴って柏木警部達のいる所へ飛び乗った。まず女性に近づくと舌打ちをする。

「……かなり食われてる。」

そう言いながらもとりあえず、治療を施すとその身体が小刻みに震えだした。その女性を見下ろす璃華の表情は一瞬悲哀を帯びた。

その表情を見逃すことなく気づいた柏木警部は何かを見極めるように璃華をじっと見据えた。

璃華は柏木警部の視線に気づきもせず、その女性を抱き上げて、そこを降りると道の端に寝かせ、額に触れる。

「アナタは誰にも襲われてはいない。貧血で倒れ、意識を失った。」

そう璃華が言う。と女性は静かに寝息を立て始め、柏木警部はまた驚いたように軽く眼を見開いた。

明らかに記憶を操作したように見える光景だったからだ。

璃華は女性から視線を外すともう一度飛び上がり、柏木警部を見下ろした。

「首。」

有無を言わさぬ言葉に柏木警部は手を離して首を璃華に向けた。

それを手っ取り早く治癒すると柏木警部の体制を崩さないよう“力”で支えながら地面に降り立つと柏木警部をそのまま地面に座らせ、男子高生に近づいた。

「これから家まで送る。君のご両親にも話しておきたいことがあるから。いいね？」

「…あ、ああ。」

そう言っただけで歩きだそうと呼び止められた。

「待て。俺の記憶は消さないでいいのか？」

その問いに振り返ると璃華は淡々と述べた。

「人は“普通”という定義で世の中を見過ぎだと私は思う。そして、なにより“普通”以外を忌み嫌い、恐れる。だけど、貴方は恐れなかった。だからだよ。柏木警部。」

名前と役職を共に言われ柏木警部の眼が大きく見開く。それを一瞥して男子高生の身体を浮かせると次の瞬間、その場から消え去った。

その誰もいなくなった空間を見て柏木警部は口元に笑みを浮かべた。

「ぜってえ、正体暴いてやる。」

The first conversation.

(後書き)

ハラハラ、ドキドキ感表せてるでしょうか？汗

One step to solution. (前書き)

大急ぎで改稿したので、誤字脱字あるかも・・・。

One step to solution.

そんな柏木警部の決意を知らない璃華は男子高生の後に続いて家に入ると両親が男子高生に駆け寄って抱きしめたのを見て、ホッと息をついた。

良かった。絆が固い。

その両親は璃華に気づくと急に怯えた表情に変わった。璃華はため息をつくとマントを脱ぎ仮面を外すと手帳を取り出して掲げる。

「警視庁の綾瀬璃華と申します。ご両親を含め、息子さんに大切なお話があります。」

璃華の落ち着いた様子に両親も冷静になったのか僅かに表情を引き締めた。

「どうぞ。上がってください。」

促されリビングの席に着くと璃華は簡潔に説明を始めた。

「まず、警視庁、刑事部、超特殊事例捜査課、別名ESP課、通称ESPという課は実際に存在しますが、現在のところ“警察”はその存在を知りません。息子さんの様子を知っているご両親には信じてもらえると思いますが、超特殊事例捜査課の人間は“普通”じゃありません。」

そこで言葉を切ると机の上に乗っているコップを手のひらの上で浮かせる。

「“力”を持っています。そして、息子さんには一応、ヴァンパイアの力の方の封印を施させていただきましたが、あくまで一時的なモノです。彼がここまで多い頻度で血を求めたということは、彼をヴァンパイアにしたヴァンパイアが日本に來ていると私は予測しています。」

そう言いながら、璃華はヴェラにこの男子高生を監視させようかと考える。本当に封印はあくまでも応急処置に過ぎない。そもそもが封印と呼べるようなモノではなく、暗示に近い。

璃華の言葉に両親は顔を些か青くし、それを見た璃華は少し間をおいてから静かに切り出した。

「最後に貴方方を選択していただきたいことがあります。良く考えてから答えてください。」

璃華の言った事に両親は顔を上げた。璃華は眼を細めながらゆっくりと言葉を口にする。

「この事件解決後にヴァンパイア化に関する記憶を消し去りたいですか？」

その問いに目の前の夫婦は顔を見合わせ、やがて璃華を見た。

「…ええ。」

両親は頷いたが男子高生は俯いたまま考え込んでいたので璃華はそちらに顔を向けた。

「…………俺は嫌だ。」

「っな?!」

父親が慌てたようにそう言ったのを睨みつけると男子高生は璃華を真っ直ぐに見据えてきた。

「記憶は消さない。俺の意思とは関係なくても俺が人の命を奪ったことにはかわりねえんだよ。」

その問いに璃華は微笑んで頷いた。

「……覚えてないかな？」

そう言った璃華に男子高生は首をかしげたので璃華はブラウンのカツラを取り出して簡単に乗せると男子高生は眼を見開いた。

「あの時の?!」

「そう。ごめんね。嘘ついて。」

そう謝ると男子高生は頭をかきむしった。

「…あ…いや、まあ、助けてもらったし。」

「ありがとう。」

その様子に璃華はクスクスと笑みを零しているとイヤホンから呼びかけがかかった。

『…………なんとかつれて来い。』

「了解。」

突如、耳を押さえながら発した言葉に目の前の三人は不安げにこちらを伺っている。璃華は真っ直ぐに男子高生の目を見据える。

「貴方は、ヴァンパイアに咬まれた後、“普通”ではないことができるようになったね？」

「…ああ。」

はつきりと答えた返事に璃華は笑みを濃くする。

「事件が解決するまでは、一緒に同行してもらいます。一般市民の安全の為でもあるし、ヴァンパイアを探す為でもある。ああ、ご両親のお二人はご安心ください。学校にはキッチンと行かせますので。」
そう言って璃華は電話番号を記入した紙をテーブルの上に置いて立ち上がり、“力”をもってその男子高生を宙に浮かせると両親に顔を向けた。

「エスプの存在は他言しないでください。」

そう言ってフワッと宙に浮くと微笑んで頭を下げた。

「では。」

次の瞬間、璃華とその男子高生はその家の玄関の外に立っていた。

「さて、いきましようか。」

いつの間にか女子高生の格好になっていた璃華を見て男子高生は問いかけてきた。

「なあ、名前、なんてえの？　つか、高校生？」

その言葉に立ち止まると振り返って目を細めた。

「人の名前を聞く前に自分から名乗るもんじゃないの？」

「嵩瑞翔。で？　あんたは？」

「綾瀬璃華。高校一年。」

にっこりとそう言うのと璃華は力をつかって一気に警視庁まで移動した。

瞬時に景色が変わり翔は驚愕に固まった。その翔を見る視線が二つ、一人は呆れている璃華。もう一つは苦笑している尾野新警視庁長官。新長官はティッシュ箱を差出しソファに座るよう促した。

「拭きなさい。」

その言葉に翔はハツとして慌てて口の周りの血を拭いてソファに腰を下ろし、新長官もその反対側に座ると璃華の方へ顔を向けた。

「警視総監から大体の内容は聞いているよ。それで、その…なんだ？ ヴアンパイアというものはその私達がよく知っている十字架やニンニク、太陽は効くのかな？」

その新長官の質問に翔も璃華を注視し、それをチラリと見遣って目を伏せた。

「LEVEEL1のヴァンパイアは純血、つまり、ヴァンパイアとヴァンパイアから生まれたヴァンパイアの事。倒すには、完全に燃やし尽くすしかない。次にLEVEEL2。準純血のヴァンパイア。人とヴァンパイアの間生まれたヴァンパイアハーフ。これは、人間と同じで首を切断したり、心臓の代わりである核を壊せば、死ぬ。クウォーターなのがLEVEEL3で、LEVEEL2と同じ。辛うじて自我が保てている人間からヴァンパイアへ変化したのがLEVEEL4。これは、太陽が駄目。最後に食欲のみの本能により行動し、自我の無いのがLEVEEL5。これは私達の知っている方法で倒せる。って言っても、十字架とか大蒜は効かないけどね。LEVEEL1・2・3までは血を吸うだけでなく性行為でも生きていけるからまだマシ。要するに人間の生気を吸ってってことね。でも4・5は人間の生き血を吸わなきゃ駄目なの。ああ、それからLEVEEL“S”は、LEVEEL1・2・3のどれかの僕ね。」

「じゃあ、俺は？」

「……LEVEEL“S”。親であるヴァンパイアの意志一つでヴァンパイアにも人間にもなれる。まあ、最近の様子じゃ、仲間になって考えてるみたいだけどね。」

肩を竦めながらそう軽く言う翔は苦笑した。

「なんか、璃華さんに言われると重く感じないな。」

「……さん付けしなくていいよ。一応、私のが年下だし。」

そう二人が話していると新長官は顔を顰めた。

「もし、そのヴァンパイアが群れを成して襲ってきたらひとたまりも無いね。」

その言葉に頷きつつ璃華は部屋の窓へ近づくとカーテンを開け、窓を開けた。璃華を目で追っていた二人はギョツと驚いた表情を浮かべた。まさに今話していたヴァンパイアと思われる風貌の男が窓の外に浮いていたのだ。

「だけど、不思議なことにヴァンパイアは家、または建物には中にいる人物に招き入れてもらわないと入れない。たとえば空中であつてもね。」

「……璃華。」

要求するような短い呼び掛けに璃華は男を振り返りもせず、言い放った。

「一度のみ、入ることを許可する。」

璃華の言葉に男は窓から侵入すると真っ直ぐに翔に近づき、見下ろした。

「これか？」

「そ。」

返事を聞きながら璃華は翔の反応を注意深く見ると翔は明らかに緊張し顔を青くしていた。

本能のレベルで気付いてるか……。ますます、ヴァンパイアに近づいてるなあ……。

そう思いつつ新長官に安心していいという合図を送った。

「同等の奴だが、浅はかだ。完璧じゃない。」

低く響く美声は小さい声でも良く聞こえ、ヴェラの言った言葉に璃華は眉をひそめた。

「どうということ？」

問うと男、もといヴェラは璃華をチラリと見遣ってから翔に視線を戻した。

『立て。』

そうヴェラが言った途端、翔は反射的に立ち上がり、ヴェラはそ

れを見ずに璃華に視線を向けた。

「なるほど。」

「ちよっと待ってくれないかね？　状況がつかめないんだが、彼は……？」

新長官の言葉にヴェラは璃華の背後に立った。

「一応、日本のヴァンパイアの中では一番の権力者ってところ。つまり、ヴァンパイアね。」

「そ、それで？　何故……？」

その問いに璃華は面倒だと言わんばかりにドサツとソファに座り、それを見遣ったヴェラが新長官のほうへ顔を向けた。

「私は、この島国のヴァンパイアを監視・統括している。ヴァンパイアは完全縦社会だ。純血に近ければ近いほど強く、弱いものは強いものに逆らうことは出来ない。随分と前の話になるが……人間を食したとしても殺さないと誓約したのだ。その証としてだが、璃華には私の命である核を渡してある。お分かりかな？」

「……つまり、今回の事件は外からの来訪者だ？」

すぐに頭の切り替えをしてそう答えた長官に璃華は満足げに頷いた。

「んで、私は絶対翔に接触してくると思うんだ。だから翔や一般人を守る為には潜入捜査しかないと考えたんだけど……残念ながら、私は今在学中だからさ……。どうにかなんないかな？」

その問いかけに新長官は厳しい表情を浮かべて璃華を見据えた。

「……君は……今までを絶つことができるのかね？」

確認に近い言葉に璃華は一切の表情を無くし、新長官を見返した。

「………今更だよ。長官。」

「……あの……真剣に会話してるとこ悪いんだけどさ。体が動かないんだけど……。」

翔の言葉に璃華は長官から視線を外してヴェラを促した。ヴェラは片眉をくいと上げただけだったが、次の瞬間、翔は力が抜けたようにソファに腰を下ろした。それを見てヴェラは思い出したよう

に璃華を振り向いた。

「璃華。そろそろ一ヶ月だ。」

ヴェラの言葉に璃華は思いつき顔をしかめ、ため息をついた。

「今は駄目。後にして。っていうか、どこかでつまんで来て。」

ため息混じりに言うも拒否権は無いと言ったような言葉にヴェラは璃華を数秒見た後、口を開いた。

「また助力が欲しければ言ってくれ。では、な。」

そういうなりヴェラは窓から出て行き、璃華は長官を改めて見据えた。

「転校のことよろしく。両親は：“操作”しておくから。それと翔は私と一緒に私の家から学校へ向かうことにするから、彼の荷物も親に届けさせておいて。」

「手配しておくよ。」

その言葉に頷き、璃華は翔を促して部屋を出て行った。翔は璃華を追いかけながらも首をかしげた。

「なあ、なんで中通って出てくんのだ？ 矛盾しないか？」

「あのねー…、結構疲れるのよ？ それにむやみやたらに使いたくないの。使えば現在の監視役に連絡が行き、行動が監視されるの。お解り？ それに今、警察は二週間前の事件でそれどころじゃないでしょーよ。」

璃華の言葉に翔は黙り込んだ。その翔をチラリと見遣りながらも近づいてきたこの事件の特別本部の部屋を見遣る。

「翔。私は姿を消してるけど、貴方には見えるようにしてあるから。会話とか視線に気をつけて。いい？」

「解った。」

そうしてお互い黙ったまま部屋を通り過ぎようとして、部屋のドアが開いた。翔はあからさまにビクツと反応し、たった今部屋から出てきた人物の目に留まった。

「…君は…。」

出てきたのは柏木警部だった。璃華は苦々しげに顔を歪めると翔

に言った。

「余計なことは言わないで。私がついているから大丈夫。」

璃華がそう言い終ると同時に柏木警部は翔に近づき、廊下に誰もいないことを確認して空いている部屋へ連れて行った。

「何故、ここにいるんだ？ 君は確か：銀の仮面をつけた奴と消えたはずだが…。」

「……：知らねえし。気付いたらここだった。」

不機嫌そうに翔がそう言うのと柏木警部は先の事を思い出したのか翔から離れ、用心深く聞いた。

「ヤツは、君がヴァンパイアに咬まれてヴァンパイア化させられ操られていると言っていた。どういうことだ？ 何かの暗号か？」

その問いかけに翔は考えるように柏木警部から視線を外して璃華を見た。

「言っていいよ。信じるかは本人次第だしね。」

そう言いつつ、璃華は柏木警部を見た。

誰も見ていないのを確認し、この無人の部屋に翔を連れ込んだ時点で多少は信じ始めている証拠。

ま、作り話だ、なんだのと思っていた“普通”を人は簡単には認められないからね…。

翔は璃華の言葉を聞いてため息を吐いた。

「暗号じゃない。本当のことだよ。あんたも俺に食われかけたんだろう？」

「……じゃあ、本当にヴァンパイアという生き物は存在すると？」

俺には精神分裂に加えその他の病気が混ざったようにしか思えないが…。」

「だったら、そう思っていれば？ これからは誰も襲われることはないしな。」

呆れたようにそう言い翔は肩を竦めて見せ、柏木警部は眉を寄せた。

「どういうことだ？」

「俺達を助けてくれた人が俺に封印を施してくれたんだよ。一時的なモノだけだな。」

翔の言葉に柏木警部はますます眉間に皺を寄せ、璃華はため息を吐いた。

「翔、それ以上は駄目。これ以上探られれば、こちらが動きにくくなる。部屋から出て。もし止められたなら、何も言わず柏木警部の首を見て。」

早口の忠告に翔は立ち上がって部屋のドアノブに手をかけるが柏木警部に止められ、翔は無言のまま柏木警部を見返し、そのままスッと視線を首に滑らせた。柏木警部は流石に己の首元を食い入るように見つめられて警戒したのか翔から離れ、離れた警部を一瞥してから翔は部屋を出た。

警視庁をでて暫くして、翔は立ち止まってしゃがみ込んだ。

「うっはゝゝ。マジ緊張した。」

「あら、コレぐらい序の口なんだけど？」

One step to solution. (後書き)

解りやすく封印って言葉を使っていますが、ただの暗示ですね。。。

Unexpected encounter.

翔が出て行った後、柏木警部は首を押さえガクリとうな垂れた。ありえねえ……。ヴァンパイアがマジにいるってのかよ……。人外のファンタジックな犯人相手にどうしろと？ しかも、本人の意思じゃねえし。どう対処しろと？

「……信じ始めちゃってるし、俺。」

そう言い、深く長いため息を吐き出すと柏木警部は立ち上がった。部屋を出てまたすぐに本部のドアを開け、部屋を見渡した。

ヤツに頼むか……。

今年入ってきたばかりの新人を見つけると近づいて声をかけた。

「木村。ちょっと来い。」

「は、はい。」

そう返事したのを聞いて柏木警部は本部を出て別室へと入っていた。

「単刀直入に言う。お前はファンタジ的な話に詳しいと聞いたが？」

柏木警部の問いに木村は戸惑ったような表情を浮かべた。

「ええ、まあ。しかし、こんな時にそんな話が必要でしょうか？」

そう答えるのは無理も無いと思いながらもソファに腰を下ろし、柏木警部は木村を見ずに一言。

「……見たんだ。」

「は？ 何をです？」

「俺は独自に事件の事を捜査していて遭遇した。そこにいたのは人外のヴァンパイアだった。だが、突然の乱入者は俺にこう言った“彼はヴァンパイアにヴァンパイア化させられて操られている哀れな少年”だと。そして、ヴァンパイア少年と乱入者は消えた。署に戻ってくると、ヴァンパイア少年が廊下を歩いていた。問い詰めるとその乱入者が封印を施してくれたから、今後事件は起こらないだろ

うと。」

それを聞きつつ木村は困惑した。

柏木警部はかなりのリアリストだ。なのに今日一日でこうも変わり、しかもヴァンパイアを見たと。

「信じられるか？ 俺は遭遇した時、そのヴァンパイア少年に噛まれた。だが、乱入者のおかげで助かり、傷も一瞬の間に無くなったんだ。」

「……その乱入者って……。」

「例の目撃された銀仮面の人物のことだ。」

そこで間を置き、柏木警部はやっと木村に視線を向けた。

「事実を知りたい。たとえば、“常識”や“普通”を取り払っても、だ。手伝ってくれるか？ もちろん他言無用で。」

柏木警部の真っ直ぐな視線に木村は頷いた。

「喜んで。」

その言葉にホッと胸を撫で下ろし、柏木警部は答えた。

「ヴァンパイア少年の家へ行って尋問する。」

柏木警部の言葉に木村は上着を取り、柏木警部の後を追った。覆面パトカーを借り、二人は少年の家へと向かったが、少年は友達の家に泊まりに行ったらしく、その相手も名前も知らないという。

「そうですか。なら、また別の日にお伺いします。」

「ええ。伝えておきます。」

そう言ったのを聞き、二人は会釈をして車に戻った。

「どうします？」

「……学校を張り込むしかないだろうな。……ところで後部座席の荷物はなんだ？」

その問いに木村は待つてましたといわんばかりに荷物を引き寄せ、中身を柏木警部に見せた。

「ニンニク、木の杭、十字架に聖水です。」

「……………そ、そうか。」

「えー…、今日からこの学校へ転校してくる方がいます。皆で助けてあげるように。」

腰の曲がりそうな年頃の教師が言うところクラス中の視線が教室のドアへと注がれた。

璃華は校則の鏡と言える様に制服を身につけ優雅な動作で教室へ入り教師の横へ立った。

茶色のストレートだ。目はグリーングレーで、ほぼ黒に近い色だが、光の当たり方で緑にも見える。

そんな璃華の姿に教室中の視線が集まった。

「綾瀬璃華と申します。よろしく願います。」

そう自己紹介すると教師はクラスの一番後ろの席に座っている翔の隣を指差した。

「一番後ろの席だ。嵩瑞、色々と面倒見てやりなさい。」

「わかりました。」

翔の返事を聞きつつ、璃華は翔の隣に腰を下ろした。

「始めまして。よろしく願いますわ。」

にっこりとお嬢様笑顔で言われて翔は少し引きつりながらも頷き、教科書を広げると紙の上に走り書きをした。

『気持ち悪いぞ。』

璃華はその言葉をチロリと見遣ると手元を見ずに返事を書いた。

『五月蠅い。それより、今日、私以外にも一人転校してくる人がいるらしい。しかも、このクラスに。』

翔は目を睜り、周りを見渡して視線がきていないことを確認すると璃華を見た。

『それってかなりおかしくないか？　なんで転校生二人同じクラスに入れるんだ？』

それをみて璃華は翔を見返し、目を細めた。

“私はこのクラスへは教師達を操って入ったんだけど、その時はまだもう一人なんていなかった。つまり、もう一人もってことになるでしょ？　ということとは？”

翔は突如頭の中で響いた声にビククリして体を振るわせた。

“頭の中で話してくれれば聞こえるから。”

“……もう一人はヴァンパイアってことか？　でも、まだ昼間だぞ？”

“あのねー……。あんた一体何聞いてたの？　物語の中のヴァンパイアでモノを見ないで。恐らく、LEVEL2のヴァンパイア。覚悟しておきなさいよ。”

そう言いながら璃華はこれまでの会話が書いてある紙をペンで塗りつぶして折り曲げた。それを見遣って翔は深くため息をはいて机の上に突っ伏し、その翔を璃華はそっと見遣ってから黒板へ視線を向けた。

やっかいだな……。大人しいヤツならまだしも。翔を襲って遊んでる時点で相当嫌なヤツだろうし……。しかも、ここは学校。ヤツの餌がうじゃうじゃ……。守りきる自信はない……。

色々考えているうちにもう昼休みになり、当然、転校生である璃華は周りに質問攻めになり、当たり障りの無い答えを返していた。

その時、突如教室に教師ともう一人の転校生であろう男の子が入ってきた。

「このクラスにもう一人転校生が入ってくるようになった。」

その言葉に促された男の子は顔を上げて教室中を見渡し、翔と璃華を見比べ、最後に璃華に視線を合わせた。

「オリガ・ルーシスです。」

低く艶のある美声が響き、クラス中の女子はうつとりした表情になった。その変化を感じつつ璃華はひとり冷めた表情でオリガを見返した。

黒髪にブルーアイズ。自分の本来の姿と同じ特徴を持つヴァンパイアに璃華は少しばかり嫌悪した。

制服が無ければ、艶かしい雰囲気とヴァンパイア独特の魅力が半端ないだろう。だが、相手は翔をヴァンパイア化したヴァンパイアかもしれないのだ。

オリガは表情を変えず静かに見返してくる璃華の様子に満足したような表情を薄く浮かべ、教師を振り返った。

「もう一人の転校生もこのクラスだと聞いたんですが？」

「そうだよ。綾瀬さん、彼と一緒に行動してあげて。転校生同士、お互いに助け合ってね。」

そのやり取りに翔は璃華を振り返り、璃華は人当たりの良い笑顔を教師に向けた。

「ええ。喜んで。」

そう言ってオリガと視線を絡ませ、璃華は違和を感じた。

違う。…今までのヴァンパイアとは桁が違う……。まさか…純血？ そんな馬鹿な。

璃華はオリガから視線を外すと翔を振り返って視線を合わせる。

“あいつと二人つきりにならないよう注意して。ちょっと用事があるから…また後で。”

伝えるだけ伝え璃華は返事も聞かず足早に教室を出て行った。璃華は人気の無い廊下に入り込むと携帯を取り出した。

『なんだ？』

「……確認したいんだけど、翔を変化させたのはLEVEL2であつてるわよね？」

『私が間違うとでも？』

「思わない。思わないけど……。」

言葉につまり、璃華はもう一度廊下に誰もいないことを確認した。『どうした？』

「……………“純血”が来た。まだ、確認してないけど、多分“純血”。こうなったら貴方の出した命令が無効になる。」

『……………そうなるな。悪いが、“純血”が現れた以上、俺はあまり助けることが出来ない。』

「わかった。でも、翔をヴァンパイア化させたのはLEVEL2であってるよね？」

『ああ。』

「ありがとう。じゃ、また。」

携帯を切って振り返ると廊下の向こうからオリガが歩いて近づいてきていた。そしてその向こうから翔が走っておってきているのが見えた。

璃華は静かに深呼吸をするとオリガに笑みを向けた。

「どうしたんです？」

「翔が案内してくれるというんだが、どうせなら一緒にと思ってな。」

そう言ってオリガは少し面白そうに翔を見遣った。その表情を注意深く見ながら璃華は翔に顔を向けた。

「言ったとおりだろう？ 翔。」

「っていうか、なんでお前は歩いてんのにそんな早いんだよ。」

その言葉にオリガは璃華を振り返って顎に手をかけ、首筋に顔を近づけた。しかし、次の瞬間、璃華は半身をよじってオリガを床に叩きつけた。と思ったが、オリガは解っていたかのように両手を突いて床との衝突を免れていた。

「気付いているんだろう？ 君は、誰かの僕にされたようだし、彼女は誰かそれなりの者の“核”を持っている。」

そう言いながらオリガは心底楽しそうにふわりと邪気の無いような笑顔を浮かべ、構えている璃華を見遣った。

「何しに日本へ？」

「……セバンズ・アーリンを警戒しているんじゃないかな？」

突然出た名前に璃華は構えを緩めた。

「LEVEL2のヴァンパイア？」

「そう。恐らく翔に会いに来たんだろうな。私はソレを追っている。」

「何のために？」

その璃華の問いに答えようとオリガは口を開きかけるが、閉じて廊下の端を見遣り表情を作って翔に顔を向けた。

「翔、俺たちを案内してくれないかな？」

その言葉に璃華はオリガの見遣った廊下の方を向くとため息を吐いた。

オリガの放っているヴァンパイアのフェロモンに当てられた女子達が追っかけてきていたのだ。

「……面倒な。」

小声のそれを聞き取ったオリガは苦笑とも取れぬ笑みを浮かべた。「コレばかりは私にもどうにもならない。」

その二人の会話を聞きながらも翔は少し不機嫌な様子で小さく言った。

「曲がったら走るぞ。」

言うなり、翔は廊下を曲がり走り出してオリガと璃華はそれを余裕で追っていくと翔は空き教室へ入っていった。三人とも部屋に入ると女子達が通り過ぎるのを待ってから話し始めた。

「で？」

璃華が促すとオリガはさも当然のように宙に浮き、空中に腰かけた。

「君達は当然のように知っているだろうが、今の時代で殺人は目を引きすぎる。我らは確かに人を食すが、パートナーに選ぶ以外は殺さずと決めた。セバンズはやり過ぎた。純血と人間のハーフであり、LEVEL2であるということに鼻にかけ、愚かなプライドを持っている。我らにはいらぬ存在だ。」

そう言ったオリガを見返し、璃華はため息を吐いてオリガの足を掴み空中から引きずり下ろした。

「私は翔を僕にし、ヴァンパイアにしようとして、もてあそんでるヤツを倒したい。貴方はセバンズを始末したい。利害の一致、協力し合いましょ？」

言葉とは裏腹に絶対嫌、とでも言いたそうな表情の璃華を見遣り、

オリガは軽く肩を竦めた。

「まあ、翔といれば必ず、奴は現れるしな。それに……」

言いながらオリガは真っ直ぐ璃華を見て、色気たっぷりの表情を浮かべる。

「気に入っ……」

「死ね。常時フェロモン全開ヴァンパイア。」

オリガが言い切る前に璃華は問答無用で切り捨て、翔の腕を掴むとオリガを置き去りにするかのように教室を出て真っ直ぐに体育倉庫へ向かった。そして、体育倉庫のドアを開けて翔を放り込むと直ぐにドアを閉め、低く呟いた。

「“我らの存在を隠せ。誰も通すな。”」

言い終わった瞬間、外との空間が遮られたように音も空気の動きも無くなった。

「お、おい？」

「……あいつ、絶対パートナーいない。」

イライラしたように髪をかき上げながら言った璃華の言葉に翔は思いつきり戸惑った。

「……………は？」

「ヴァンパイアは稀に人間に惚れる奴がいる。そうするとヴァンパイアはその相手の了承を得た上で相手をパンヴァイアにし、生涯のパートナーとする。そうすると生きている人間を狩らなくてもお互いパートナーの血を飲みあえば、空腹はなくなるし、性交すればもっと楽。しかも相手は惚れた相手だから一石もせずに二鳥も四鳥もしちゃうわけよ。もちろんヴァンパイア同士でパートナーの場合もあり得る。その時、血は吸い合えなくても、性交できるから同じ事。」

物凄い早口にそういった璃華の言葉に翔は驚いた表情を浮かべた。
「じゃあ、何。さっき、オリガが言ってた“気に入った”ってそういうことか？」

「……しかも、脳に直接“逃がさない”とか伝えてきやがった。あ

のヴァンプ。」

「それくらいいいじゃないか？　ところで、入れてくれない？」

璃華の言葉に反応する言葉がドアの外から聞こえてきた。璃華は思いつきりそちらを向いて険しい表情を浮かべた。

「断る。むしろ、この学校の敷地内から出て行け。」

するとドアの外からクスと笑い声が聞こえてきた。

「そんなことは無理だって君だって解るだろう？　この学校という建物は校長という役職の人間、または理事長という役職の人間の所有物だ。君達、生徒はその“場”を借りているに過ぎない。生徒一人や二人の言葉にあまり拘束力はな――。」

「なら、私から逃げろ。出た瞬間に杭で心臓を狙う。」

低く真剣味の帯びた声にオリガは黙り込み、やがてため息を吐いた。

「……わかった。とにかく、協力の約束はしたからな。」

そう言ってオリガが去っていくのを空気の動きで察知し、結構離れてから璃華は脱力したように座り込んだ。

「……なあ、授業は？」

暢気にそう聞いてくる翔に苦笑しつつ、璃華は立ち上がった。

「“幻影” 見せてるから出てることになってるよ。うちらは、帰ろうか。色々、整理しないとね。」

“幻影” って……すげえな、おい。」

思っていることが口に出ている翔を見て、呆れた表情をすると促したが、翔は立ち止まったまま動かなかった。それをいぶかしんだ璃華は翔を振り返り、問うような表情を浮かべた。

「……なあ、その姿でずっといる気かよ？」

「必要だからね。」

声は軽く言っているにもかかわらずそれ以上は聞くことを許さない雰囲気を持って璃華がいうと翔は納得いかないとも言おうような表情を浮かべつつも、黙って璃華の後に続いた。

玄関で靴を履き、校門を出たところで璃華は姿を本来の姿に戻し、

服装までも変えた。それを見て翔はホッと胸を撫で下ろした。

「で？　これからどうすんだよ？」

「ん〜：そうだなー。まあ、早かれ遅かれセバンズは現れるからソレの準備をしないと。LEVEL2は私でも勝てるかどうか危ういほど強いからね。」

その璃華の言葉に翔は璃華の肩を掴んだ。

「ちょっと待てよ。おい。ヴェラには勝ったんだろ？」

「……いいえ。圧勝したわけじゃない。私は死ぬ寸前までいったし、あいつは完全に無傷だった。」

「：じゃあ、どうやって？」

「私が“力”をつかって偶然だけど“核”を揺さぶることができたから。でも、ヴェラを殺すわけにはいかなかった。彼の“核”は私が見たこともないほど巨大で、彼がヴァンパイアの王かと思ったから。まあ、全世界のとまでは行かずとも日本という島国での頂点には立っていたみたいだけだね。それにヴェラはプライドも矜持も高いけど、馬鹿でも愚か者でもない。セバンズとは違うの。セバンズとは苦戦することになる。翔も私と戦う覚悟しておいて。」

「はあ？　どういうことだよ？」

大きい声を出した翔に璃華は周囲を見渡してから翔を見た。

「翔、貴方はセバンズのし・も・べ。今もね。セバンズが近くにいれば、私の施した封印なんて無いに等しいの。これだけは言っておく。私は最後まで貴方を攻撃しない。だけどね。私が死にそうになったら貴方もセバンズも共に死んでもらう。セバンズがいたら貴方はまた人間を襲う苦痛を味わうし、あいつが生きてたらヴァンパイアと人間は共存できない。」

真面目にそういった璃華に翔は璃華の肩を掴んでいた手を下ろした。

「：ああ。わかった。んで？　この後、何処行くんだ？」

「決まってるでしょ。博士の所よ。」

「はあ?!　ぜってえ嫌だ。あいつのテンションについてけねーし。」

第一、身体をいたるところ調べられて…。」

そう言いながらどんどんガックリと肩を落としていった翔に璃華は苦笑した。

「まあ、あの人は色んな意味でオタクだからねー。でも、私は、総理はいい人選をしたと思ってるよ。」

そう言って璃華は翔の手を掴んで周りを注意深く見渡し、力を使っ
て飛んだ。

それを車の中から見ている視線が二対あることも知らずに。

「聞いたか？ 見たか？」

「み、見ました。聞きましたよ。本当にいたんですね。でも、LE
VEL 2 って…ヴァンパイアの王って…。」

それを横に聞きながら柏木警部は考え込んだ。

彼女が例の仮面の、か？ 今、聞いた話によるとそうとしか思えない。それに、過去にヴァンパイアと戦って死に掛けたことがあるとも…。

「さあな。本人に聞くしかないだろうな。それに彼女らが言っていた“博士”とやら、そして“総理”という単語が気になる。わかるか？」

「…つまり、彼女のような存在が秘密裏に国の監視下で存在していると？」

「有り得ない話ではない。まあ、とにかく次は俺が個人的に疑っている人物の元へ行こうか。」

そう二人が話していると車の硝子が叩かれた。二人はギョツとしてそちらを見ると黒髪でブルーアイズの美少年がにっこりと微笑んでその場にいた。木村は反射的に鞆に手を伸ばし、それを見た少年は苦笑して硝子越しに言った。

「心配せずとも我らは人間を殺す気など無い。」

その発言に柏木警部は眉をひそめながらも何故硝子を叩き割らないのだろうかと思った。

「ああ、それから我らヴァンパイア…それも上位の者に人間間で伝

わっているモノなど効かない。LEVEL1は純血。燃やしきらなければ死なないし、LEVEL2は首を切断するか“核”を壊さなければ死なない。LEVEL3も同様だ。もう一つ、補足しておこうか。我らヴァンパイアは建物の中にいる人間に招かれなければ、その中へ入ることはできないんだよ。」

そう言われて硝子をあけるほど信じていない柏木警部はそのまま問いかけた。

「何故、教える？」

緊張したままの柏木警部にクスリと笑みを零すと少年は二人の消えていった方向へ視線を向けた。

「彼女達の邪魔をしないでくれないか？ セバンズは君達のような人間の手におえる相手ではない。執拗に彼女達の周りをうろつけば、セバンズの標的にされ殺されるかヴァンパイア化させられるのがオチだ。」

そう話していると校門から生徒達がゾロゾロと下校を始めた。

「……彼女はそのセバンズとやらに勝てるのか？」

その柏木警部の問いに少年は視線を車内に戻し、眼を細めた。

“確率は五分五分だろう。でも、彼女には私も付いているし、経験もある。それなりにいいところまではいくんじゃないかな？”

突如、頭の中に響いた少年の声に驚きつつも冷静に言葉を返そうとすると一人の女生徒が近づいてきた。

“君達の乗っている車は彼女達に見えないようにしてあるから、暫く待っていてくれないか？”

その言葉に柏木警部と木村は顔を見合わせ、少年と女生徒の様子を窺った。

「オリガ君。一緒に帰らない？」

オズオズと行って来たその子にオリガは周りを見て、視線が集まっていないことを確認すると考える風を装いつつ女生徒が柏木警部達に背を向けるような位置で立ち止まると彼女に笑いかけて近づき、耳元で囁くように言った。

「ごめんね。ちょっと用事があるんだ。」

そういつてオリガは車の中にいる二人に見せ付けるかのように女生徒の首筋の髪の毛をどけて牙を突き刺した。数秒もしないうちに牙を抜き、女生徒から離れる。

「じゃあね。」

そう言うとき女生徒は何事も無かったように帰っていった。一方、その一部始終を見ていた二人は愕然とオリガを見、オリガはハンカチで口元を拭いつつ二人を改めて見下ろし、苦笑した。

「……恐ろしいか？　でも、な。君達だって生き物を殺して食べているだろう？　偽善ぶるのはよしてくれないか？」

「オリガ様。」

また新たな声に車内の二人は緊張を高め、オリガはその様子に苦笑したまま声の主を見遣った。

「ああ、君がヴェラだね。」

「ええ、お会いできて光栄です。」

「彼女からはまだ聞いてないだろうが、日本だけでなく全世界で今、人間を殺すことは禁じられている。安心しろ。」

そこまで言いつてオリガは車内にいる二人とヴェラを幾度か視線を往復させ、にっこりと笑みを浮かべた。

「彼らは彼女達の邪魔になると思うか？」

その言葉にヴェラは車内の二人に目を向け、数秒の後オリガに目を向けた。

「いいえ。彼女にとっては“邪魔になる”かもしれませんが、彼らは正義感の強い人間です。むしろ、役立つと考えた方がよろしいでしょう。」

「そう。なら、君は彼らを護衛してくれ。」

「……………」

返事を返さないヴェラにオリガは目を細めた。

「納得いかないか？　でも、残念だが、これは命令だ。彼らを守れ。」

「

オリガの言葉にヴェラは無言で頭を下げ、ソレを見ずにオリガは車内の二人に視線を向けた。

「彼に君たちを守らせるから、彼女達の邪魔をしないように頑張れ。」

そう言ってオリガはヴェラを残して去っていった。オリガが見えなくなるとヴェラはため息をついて頭を上げた。

「全く。純血までもがでてくるとは…。厄介な事件だな。」

人間臭い言い方に柏木警部は驚きつつ声をかけた。

「本当に君達は安全なのか？」

問いかけにヴェラはさらにため息を吐いた。

「ヴァンパイアは完全縦社会だ。純血であるLEVEL1の方がたが下々の監視や管理を行っている。我らヴァンパイアは純血の者に逆らうことは出来ない。別に信じなくとも私は君達を守らねばならない立場に置かれた。私の存在は気にするな。」

そう言っつてヴェラの姿は空気に溶けるように消えていった。ヴェラが消えて暫くして木村が口を開いた。

「いなくなっただけですかね？」

その言葉に柏木警部は車周辺に視線を流した。

「さあな。だが、俺達を守るとかいったから、近くにはいるだろうな。」

Unexpected encounter. (後書き)

刑事達、だんだんと邪魔だね。。

The stage is completed.

(前書き)

ちよつと短め。。次への繋ぎの内容です。。

The stage is completed.

「なんか俺……頭パンクしそーい。」

そういうながら、翔は机の上に突っ伏した。

「大丈夫ですか？」

相変わらず完全に演じている璃華に声をかけられ、ますます翔はうな垂れた。

“セバンズってヤツは来るんじゃないのかよ？”

“来るよ。もう直ぐね。”

思考での会話に慣れてきた翔は机に突っ伏したまま会話を続けた。
“直ぐっていつだよ？ 俺、毎日ストレスたまりまくりなんだけど。”

“……今日、この学校に転校生がやってくる。多分、ソイツ。”
璃華の言葉に翔はバツと上半身を起こした。

“今日？！”

“……そ。今日。まだ大丈夫よ。昼間はセバンズだって普通の人間同様過ごしてくれるでしょ。それにこちらに近づいてくれば、翔が本能レベルで気付くはずだよ。”

そう話していると四時間目が終わり、昼休みになった。

わいわい、と賑やかな教室の中、突然、大きな音を立て教室のドアが開き、金髪の美少年が人好きのする表情で立っていた。それを見て璃華は翔の表情を窺うと完全に真っ青になっていた。

ヤツか……

そう思いつつオリガに視線を向けると向こうもこちらに視線をよこし、頷くとオリガはその存在を示すが如く立ち上がった。

「セバンズじゃないか。君もきていたのか？」

そのオリガの言葉に翔の方を向きかけていた顔がオリガに向く。

「……オリガさん。一体なぜ、日本へ？」

完璧に内心を隠し切った返しにオリガは余裕な表情で聞き返した。

「セバンズ。どうして来た？ 答えてくれるな？」

「知人に会いに来ただけですよ。」

さらっとそう質問に答えつつ、セバンズは真っ青になっている翔を見たがその視線を遮るように璃華が翔の前に立って翔に話しかけるのを装った。それにセバンズが気付いたのか心底楽しそうに目を細めた。

「そういうことですか…。」

そう言ってそのまま何も言わず教室を去っていった。それを見送ってオリガは璃華と翔に近づいた。

「翔。大丈夫か？」

「…なんとか…。」

未だ顔を真っ青にしている翔にオリガは翔の腕を掴んで立たせた。
「璃華。君も来い。」

その言葉に璃華が周りを見るとすでにオリガが周囲に幻影を見せているのか誰もいないオリガの席の周りに人だかりが出来ていた。それを横目に璃華はオリガと翔を追った。三人は誰もいない教室へ入った。

「翔。この机の上に横になれ。」

翔は言われたとおり、いや命令されたとおりに横になった。その様子を横から見ていた璃華の疑問の視線にオリガは険しい表情を浮かべた。

「君は翔に簡単なモノを施しただろう？ アレでは持たない。それに、血を飲んでいない状況が長く続きすぎて反動がくる。」

「…：…わかった。」

了承の言葉にオリガは翔の手首に噛り付き、直ぐに離れた。オリガは己の唇に付いた翔の血を舐めつつ低く囁いた。

「「嵩瑞翔。汝、暫し我が僕となれ。」」

なるほど…。より強い者の僕契約をすることでセバンズの拘束を弱めたわけか…。

その様子を見ながら、璃華は少しだけオリガに対する警戒を解い

た。

オリガはビクビクッと震える翔の身体を見遣りながら言った。

「重複の契約はしたが、本来上乘せはできん。もって一週間だ。」

「……わかってる。」

そう返事をしつつ璃華は翔を見た。

最近には柏木警部とその部下である木村という厄介者がいる。すでに厄介という領域を超し、邪魔になってきている。さっきのやり取りで完全に璃華はセバンスに目をつけられた。目をつけられた以上、彼らも危険になるのだ。

璃華はオリガを見た。

「オリガ、暫く翔と一緒に行動をお願いできる？　あと私の幻影も。」

「いいが……どうした？」

「こちらの問題を片付けなきゃならないから。」

「……わかった。」

そういつてオリガは翔に視線を戻し、璃華は二人を残して学校を出ると姿を消したまま真っ直ぐに警視庁へと向かった。警視庁に着くと璃華はまっすぐにこの事件の対策課の部屋へ入っていき、忙しそうにしている柏木警部に近づくことと耳元で囁いた。

「話がある。木村という者と共に駐車場へ。」

そう言うとき柏木警部の表情が険しくなった。璃華はそれを一瞥し、そのままビルで日陰になっている駐車場へ向かった。

駐車場につくと璃華は捜査用の衣装を身にまとって待つ。

暫くして柏木警部と木村が駐車場へやってきた。

「こんにちは。柏木警部。」

「……何の用だ？」

その柏木警部を無視して木村に視線を向けた。

「こんにちは。木村さん。」

木村は緊張してからか無言だった。璃華はクスリと笑みを零した。「さて、と。最近、お二人は私について調べてるご様子。だが、危

険極まりない。」

そこまで言うとは柏木警部は片手を上げて止めさせた。

「君は嵩瑞翔と同じ学校へ通っているだろう？ 姿を変えて。」

その言葉に璃華はため息をついて仮面を外し、暑苦しいマントも脱いだ。

「……………今日からは付きまとうのを止めて欲しい。」

「無理な話だな。」

「止めろと言ってるの。私はお二人まで守る余裕など今日からもう無い。」

璃華の険しい表情と低い声に柏木警部は片眉を上げた。

「セバンズが来たか？」

「……………どうしてそれを？」

その問いに柏木警部の背後の闇がうごめき、璃華は剣を出現させるとそこへ投げ放った。

「璃華。危ない。」

少々不本意そうに璃華が投げた剣を片手にヴェラが現れた。

「ヴェラ……？ どういうこと？」

ヴェラは二人を無視し璃華に近寄ると剣を璃華に返した。

「オリガ様のご命令でこの人間二人を守護している。」

その言葉に璃華は益々顔をしかめた。

「そ。わかった。ヴェラ。罰として無し。」

璃華の言葉にヴェラはうろたえた。

「ちよ……つとまで。それは困……。」

「じゃあ、死ね。」

容赦の無い璃華の言葉に柏木警部も木村もギョツとした。

そんな二人をよそに璃華はヴェラを睨み据えた。

「確かにヴェラ。主従の契約をした。だけど、私がお前の犠牲になった人間を忘れたとも思った？ たった数年の行いでその事実が消えるとしても？ 確かに共存はできる。でもね、人間にとっての脅威はない方がマシだとも思っている。」

その璃華にヴェラは心底辛いという表情をした。

「その表情も止めて。偽りのモノなどいらぬ。彼らを守るといふのなら、そうすれば？ この場からは消えて。」

その言葉にヴェラはうな垂れたまま姿を消した。璃華は静かに怒りを押さえ込むと二人を振り返った。

「すでに私はセバンズに目をつけられた。近いうちにセバンズを私は殺す。その間までにセバンズは私の恐怖心や苦痛を煽る為に周囲の者を手にかけていく。たとえ、私のことを知らなくても近くにいう理由で。今日から一週間だけは付きまとうのを止めてほしい。ただでさえ、セバンズは餌がうじゃうじゃいる学校にきた。守りきる自信は無い。」

それだけ言うのと柏木警部と木村に背を向けた。

「悪いが、俺も無理な話だ。」

その言葉に璃華は立ち止まった。

「16・7そこの女の子が命をはって戦っているのを、指をくわえて見てろって？ 悪いが、俺はそこまで落ちぶれちゃいない。」

「……愚かだね。人を助けるといふことは己自身も助からなければならぬ。命をかけても守るといふけど、それでお前が死んで助かった者はお前の死の分その後、苦しむことになる。それを理解しているのかな？ いくら正しくともその判断を誤れば、ある時ソレは他人に深い傷を負わせるんだよ。柏木警部。」

静かだが、的をえている言葉に柏木警部は言葉をなくした。

「……一週間だ。」

言外に付きまとうな、という意味を載せてそう言うのと璃華は姿を消して学校へ戻ったが、校門の前にはセバンズがにやりと嫌な笑みを浮かべて立っていた。

「璃華ちゃんだっけ？」

「あら、自己紹介しましたっけ？ 私。」

完璧な璃華の対応にセバンズは同じように微笑んだ。

「いや、クラスのお友達の血に聞いたんだよ。」

「あら、やだ。血に聞けるわけじゃないですか。」

さりとらなんでもないのでのように流そうとするとセバンズは表情を変えた。いや、正確には瞳の色を変えたのだ。それをみて璃華は何も変わらずという風になつこりと微笑んだ。

「嫌だ。それ、効くとも？」

「……ほう。中々、根性がおありの様だ。」

ほんの少し忌々しげにそういうセバンズに璃華は無表情になった。「当たり前。昼間のここは“陽”の気が満ちている。いって置くけど、次、クラスメイトを殺せば、私は全力でお前を消滅しに行く。そうでなくとも近いうちに、ね。」

「……………下等な人間が、俺に勝てるとも？」

「ええ。現に貴方は私の中にあるLEVEL2のヴァンパイアの“核”に気付いていないでしょう？」

璃華の言葉にセバンズの顔色が代わった。

凶星か…。

璃華はニヤリと微笑んだ。

「そう。貴方よりはLEVEL1に近いヴァンパイアの“核”。侮らないほうがいい。Mr.セバンズ。」

そう言つて見下した視線をセバンズに送つて教室へと戻った。セバンズは邪魔者が増えたといわんばかりに璃華の背を睨みつけた。

“力”をつける必要があるな…。

そう思いつつセバンズは人間の雌の好意のある視線に舌なめずりをした。

だが、“学校”というこの場では無理だ…。

次の日からまた死体が増えていった。それはニュース番組を盛り上げ、世間を騒がせた。

柏木警部と木村は犯人を知っている為かあまり捜査に力を入れる

ことが出来ずにいた。

「二人一組でパトロールを強化するように言われた。俺らも総動員で、だそうだ。これがパトロールの割振りだ。」

そう言って柏木警部は紙を配り、木村を呼んだ。

「俺達はこの川周辺。」

そしてその一方、璃華は今にも暴れだしそうなほど、怒りをためていた。

「もう限界だわ。強硬手段にでる。」

その言葉にオリガが片眉を上げた。

「どのパターンだ？」

「私が餌になっておびき寄せる。オリガ、翔、準備をお願い。」

素晴らしい残し、璃華は姿を消した。翔はオリガを振り返って問う視線を向けた。

“彼女は姿を変えて罔になり、例の場所へセバンズをおびき寄せ、そこで奇襲をかける。だが、翔。君はそこにはすでにセバンズの言いなりになっているだろう。ある程度、覚悟しておくんだ。”

オリガの声に翔は顔を歪めて机に突っ伏した。

The stage is completed. (後書き)

誤字訂正いたしました。報告ありがとうございます m (m

Fight and end.

セバンズは暗い道を歩き、間の前をふらふら歩く女性に気付いた。ニヤリと口の端をあげるが周りにはまだひと気が多いのである程度の距離を置いて追う。付いていくと都合のいいことに賑わっている橋から離れ、土手へと向かっている。

女性が酔っているのかヨロリと倒れそうになったところをセバンズは支えた。

「お姉さん。大丈夫？ 結構飲んでるの？」

「えー？ そんなに飲んでないよー。ほらあ。」

間延びした台詞と打って変わって何処に隠し持っていたのか繰り出された鋭い剣先にセバンズはギリギリで交わして、舌打ちをした。「お前か。」

「随分と人の神経を逆なでするようなことをしてくれたね？ おかげでこっちは我慢の限界。」

璃華はそう言いながら取り出した小瓶の蓋を口で開けると中身を剣に垂らして小瓶を投げ捨てる。

「ハ！ だからどうしたと？ “翔”！！！！」

そうセバンズが叫ぶと何も無い空間から無表情で目が虚ろな翔が現れたが、璃華は表情をピクリとも変えず、セバンズだけを見据え、静かに呼んだ。

「オリガ・ルーシス。」

呼びかけにオリガは璃華の斜め背後にフワッと優雅に登場した。

セバンズは嫌悪感を露にオリガを見た。

「気高き純血であろうお方が人間の味方ですか？！」

オリガは困ったような苦笑した表情を浮かべた。

「何をもって誇りというか、何をもって愚かというか……。どうやら我々とセバンズとは少々意見が違うようだな。」

静かに言い返されセバンズは益々、怒りを顔に表すると真っ直ぐ

に璃華に向かって跳躍した。流石に純血と戦う気は無いようだ。

「オリガ!! 翔を!」

そう叫んで璃華は剣を振るいセバنزの接近を許さず、またさかさず、間合いに入ってこようとしたセバنزの首を狙って次を繰り出す。微かに紅い線をひいただけでセバنزはまた璃華から離れる。セバنزは首の血を拭って忌々しげに璃華を睨み、姿を変えた。

瞳は黄金に変化し、牙が唇の合間からはみ出る。整いすぎているために冷たく感じる端正な顔の横に尖った耳が覗いた。

変化を視認した次の瞬間、セバنزの左手が璃華の腸を貫いた。はらわた

「…カ、ハ…ッ…。」

口から大量の血が漏れ、璃華は顔を歪めた。

速い…。

璃華は冷静に自分に突き刺さっているセバنزの腕を切り落とすと跳躍して離れ、己の腹に突き刺さったままのセバنزの腕を抜き取る。同時に左手を腹に当てて治癒を施した。

それを見たセバنزは目を細めた。

「ほう。普通の人間とは違うようだな。」

「……………」

何も答えずに無言のまま璃華もセバنز同様に本来の姿へと変わり、更に捜査用である軍服に似た服だけを身に着けた。

まずは“核”の位置を探さなきゃ…。

璃華は本気の速さで移動し、セバنزの残った右手を切り落とそうと剣を振るったが、紙一重で交わされ、拳句、背中を殴打された。璃華は地面に片手をつき、半身をねじるようにして剣でセバنزの首を斬ろうとするが、やはり避けられた。

セバنزは己の手を見て璃華を見た。

「背骨を何本か折ったと思ったが…?」

「直した。大人しく死ね。」

その切り替えしにセバنزはニヤリと笑みを浮かべた。璃華の心に恐怖が存在しているのを感じ取ったのだ。

「それは丁重にお断りする。」

セバンズは璃華の背後に移動すると首に噛り付いた。と思いきや、セバンズが口にくわえていたのは璃華の腕だった。それでも構わずに勢い良く血を吸いあげた。流石に璃華も焦りセバンズの首に剣を向けたが、すでにセバンズは宙に逃れていた。

やっぱり：スピードが違う：

璃華は左手が干からびているの感じつつ、そこへ気を送り込んで治癒を施しながら、飛び上がってセバンズの足を切り落とそうと横に凧ぐ、それを察知してセバンズが避けるが璃華の剣は突如、軌道を変えて両足首を切り落とした。

流石にセバンズはピクリと怒りに震えた。

こんな人間に：！！！！

セバンズは璃華に背を向け、この土手に近づいてきパトカーへと向かった。璃華はハツとして宙に浮いてそれを追った。

「ん？ 柏木警部：アレって：。」

木村の声に反応するように窓がいきなり全部閉まった。

“目を閉じてヤツの目を見るな。”

何処からか聞こえた声に柏木警部と木村は反射的に車を止めてそれに従った。数分もしないうちに車に凄い衝撃が落ち、思わず木村が目を開けそうになる。

「目を閉じろ！！」

柏木警部の怒声に木村は慌ててまた目を閉じた。

「小癪な人間が：。余計な知恵を誰から？」

車窓の外から聞こえる同性だというのに魅力ある声に聞き覚えのあるヴェラの声が発せられた。

「私だ。セバンズ。悪いが、オリガ様からの命令でこの人間は私が守護している。引かぬのなら、それ相当の対応をするが？」

「ヴェラ！！ 邪魔しないで。セバンズは私が殺る！」

「だ、そうだ。この人間を襲っている暇なぞ、なさそうだが？」

ヴェラの言葉と追いついた璃華の存在に舌打ちを鳴らした。璃華

はパトカーの中身をチラリと見遣ってからセバンズを見た。

「回復する気？ プライドを何かと勘違いしてるんじゃないの？」

「黙れ。下衆が！」

セバンズは怒鳴るように言い捨て、璃華の頭を掴もうと手を出したが璃華は寸前で交わしてセバンズの額を狙った。剣は見事に額に突き刺さるもセバンズになんのダメージも残さなかった。そのことに舌打ちし、セバンズから離れた。

セバンズは目を細めて、璃華を見た。

「人間にしては強い。それは認めてやる。だが、お前は私の“核”がどこにあるかわかってないようだな。」

璃華が気付いた時にはまたセバンズに腹を抉られていた。グチュと肉のつぶれる音に柏木警部も木村も目を開けて固まり、ヴェラはその二人を横目に一瞥し、また目の前の光景に視線を戻した。

セバンズは腕を引き抜き、掴んでいるものを口へと運んだ。璃華は前のめりに崩れ落ち、辛うじて左手を腹に当てて倒れ込んだ。

ヤバ……。血、流しすぎ……。っていうか、すでに治癒力も低下してきてる。

「だ……から……どうし……た？ ヴェラと……戦った時でさえ……そんなもん……だった。」

未だ倒れている璃華の言葉にセバンズはヴェラを振り返った。

「こんなひ弱な人間に負けただど？」

ヴェラはセバンズの言葉に静かに言葉を返した。

「ひ弱？ まさか。純血種であるオリガ様の呪縛さえ容易く跳ね返した人間だぞ？」

「そう……いうこと。甘く見られても……困る。」

弱々しく立ち上がった璃華を見てセバンズは笑った。

「これでか？ オリガ様が手加減をしたに決まってる！」

そう叫んだセバンズの顔の右半分がほんの僅かに淡く色を変えたのに璃華は気付き、口角を上げた。

『どうかな？ その身で確かめてみる？』

突如、力のある声にセバンズは表情を凍らせ、次の瞬間、膝を付いた。

「カ…ッ…：…な、なにを…？」

突如苦しみ始めたセバンズをいつの間にか立っていた璃華は冷たく見下ろし、剣を横に薙いで首を切り落とした。

「ヴェラ。どこ？」

「…：…耳の下だ。」

その答えに璃華はセバンズの顔を横に向け耳の下を剣で突き刺した。その瞬間、セバンズの身体は跡形もなく砂と化した。璃華はまた小瓶を取り出してその砂にそれをふり掛け、するとジュと音を立てて砂が溶けていった。

「アレを使ったな？」

そのヴェラ呟きに肩をすくめる。

「…：…つたって、何百本の針を操作して通過させるし、流石に動いてるものは狙いづらいし、外したら気づかれるし、二度と使えないでしょ？ 諸刃の剣って言ってほしいね。」

璃華はオリガが翔を抱えて近づいてきたのを見遣った。

「まさか、殺してないでしょーね？」

「私が約束を守らぬとでも？」

少し不満げにオリガがそう言うのと璃華は面倒臭げにハイハイと手を振った。

「アンタの契約も破棄しなさいよ。」

璃華の要求にオリガは翔を地面に寝かせると一言。

「“嵩瑞翔。汝を解放する。人間に戻るがいい”」

その言葉に翔の身体がビクリと大きく震えた。

「う…あ…：…：…あ？」

翔は変な声を上げて起き上がり、自分の両手を見下ろし、次に璃華の服を見てギョツとした。

「お、おい！ 大丈夫かよ？」

「大丈夫。二回ほど腹を抉られただけ。」

軽く言ってしまう璃華に翔は呆れた。

「お前な。軽々しくいう内容じゃねえだろ？」

「璃華。血が足りてないのだろう？ どうだ？ この際、私の…。」

「黙れ。能天気自己中ヴァンパイア。」

その先をオリガに言わせまいと璃華はそう言って翔の腕を掴みパトカーに近づいた。

「送ってって。こいつらと一緒にいたら、精神がやられる。」

そう言いつつ潰れたパトカーを直して、了承も得ず乗り込み璃華はすぐに目を閉じた。翔は心配になり璃華の鼻の下に指をやりとちやんと呼吸はしているようだった。

「彼女は生きてるのか？」

助手席から聞こえてきた柏木警部の声に翔は頷いた。

「ああ。生きてる。」

そう言って笑みさえ浮かべた翔を見て柏木警部は少女の言った言葉の意味を改めて痛感し、またこのまだ十六・七年しか生きていないという少女がなぜここまで…と、益々気になった。

「で？ 我々はどこへ君達を送り届ければいいんだ？」

問いかけに翔は璃華を見下ろした。

きつとこいつは知られる事を嫌がるだろうし…。なら…。

「俺ん家。どーせ、調べてあんだろ？」

そう言って翔は車の外でいまだこちらを見ている二人のヴァンパイアを見た。オリガは作っているのかいないのか定かではないが、璃華を見て心底惜しそうに見ていた。そして、ヴェラはそのオリガと翔や警官二人を静かに見ていた。オリガもそうだが、ヴェラも一体何を考えているのかわからない。

ま、ヴァンパイアだしな。

そう思いつつ、運転席の背を蹴飛ばした。

「早く車動かせよ。いつまでヴァンパイアの傍にいる気だよ。」

翔の言葉に柏木警部も木村とやらもオリガから視線を外して、慌てて車を走らせた。

ははーん。ヴァンパイアのオーラってヤツに嵌りかけたな。

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべつつ、二人に気付かれないように璃華のイヤホンを外して璃華のポケットへ落とした。

「それにしても…彼女は…その、お腹を二度も抉られたんですよね？　どうやって直したんでしょうかね？」

木村の疑問に柏木警部も首をかしげ、翔を振り返った。

「何か知ってるか？」

「……知っていたとして、俺が言うんでも？」

そう返した翔に柏木警部は肩を竦めた。

「場合によりけりだ。俺達も襲われかけたし、俺は被害者でもある。知る権利はあるだろう？」

柏木警部の言葉に翔は顔をしかめ、チラリと璃華を見下ろした。

“悪い。治癒のことだけ、教える。”

思考でそう伝え、翔は柏木警部をウザそうに見た。

「……簡単だよ。簡単な医療の知識さえ持っていればわかる。人間の細胞の分裂や再生の回数は限りがある。だから、無闇に細胞の变化を早送りにするわけにはいかない。そこで、だ。自然界から色々取り入れて細胞を作り、最後に自分の細胞と融合させ、治すんだ。」

その言葉に自然と柏木警部は己の首へ手を当てた。

「……あんな一瞬でか？」

その問いに答えず翔は馬鹿にしたように柏木警部を見遣った。

「知ってるか？　大人の人間の元になる材料なんて一万そこらで買えるんだぜ？　安っちーよな。」

これ以上は何も答えないといわんばかりにそういった翔に柏木警部も口を閉ざした。暫く沈黙が続いたが突然ビクリと翔が身を震わせた。何事か、と柏木警部も木村もそっと翔の様子を窺った。

“今、どこらへん？”

“ビクリした…。もうすぐ俺ん家。そんなことより、大丈夫かよ？”

“そう。なら、私はこの車の中に置いてっていいから帰りなさいよ。”

”

そう言った璃華に翔は璃華を凝視した。

“ お前、どうすんだよ？ ”

“ あゝ…いいから。帰っちゃって、帰っちゃって。どうせ、そのうち君んちに訪問しに行かなきゃならないから。それまでに記憶のこ
とよく考えておいてね。 ”

その口調に大丈夫なんだと翔はホッと胸を撫で下ろし、車は止まった。

「着いたぞ。」

「ああ。サンキュな。」

そういうつつ、翔は璃華を一回、見下ろした。

“ ……わかった。またな。 ”

“ またね。 ”

翔が璃華を置いて車を降りると柏木警部は慌てて窓を開けた。

「おい。彼女はどうする気だ？」

「よろしくなー。」

ヒラヒラと手を振りながら翔は家へと入っていった。それを啞然と見送った柏木警部と木村は心底困り果てた。

「どうします？」

「どうもこうも、彼女の家なんて知らねえだろーが。」

“ お二人。 ”

突如頭の中に響いた声に二人は璃華が起きているものと勘違いして反射的に振り返った。しかし、璃華は未だに力なく寝ていた。目を閉じて。

“ 残念なことに私は血を流しすぎた。身体が全く動かない。悪いが、しばらくこのままで…。 ”

段々と伝わってくる声が小さくなってくると柏木警部は慌てた。

「お、おい！ ちょっとまって！」

だが、いくら待っても璃華の返事はない。柏木警部はガックリとうな垂れた。

「……………仕方ねえ。おい、木村。俺ん家に回せ。ついでにお前も泊まれ。」

F i g h t a n d e n d . (後書き)

び、描写大丈夫でしょうか (汗

Unnatural death.

「……くそっ！！　く……っ……！？」

暗い部屋の中、ディスプレイの灯りに照らされた少年の顔は苦渋と焦りが浮かんでいた。手は汗ばみ、少年の顔は必死にディスプレイを凝視し、指はこれ以上なくらいに機敏に動いていた。

「…そんなっ！！　嘘だろ……。」

少年は顔を真っ青にして呆然とディスプレイを見遣った。そこに浮かんでいるのは“GAME OVER”という一文。それを見ていた少年はやがて歯をガチガチと鳴らし始めた。決して故意に鳴らしているわけではない。

誰もいないはずの己の部屋に何かの気配を感じ取り、その恐怖ゆえにだ。

少年は息を荒くして立ち上がり、壁際へよった。

「……嫌だ……。お、俺は……まだ死にたくない……。」

“GAME OVERだ。剣士、白井浩巳。”

何処からとも無く空中に浮かんだ文字に少年は崩れ落ち、目を見開いた。

「^{かしわぎ}柏木警部。事件です。死者が出ています。」

焦る様子を見せず、ゆっくりと答えた木村に柏木警部は米神をピクリと振るわせ、バンッと机を叩いて立ち上がった。

「ゆったりという内容じゃねえだろーが！！　行くぞっ！！」

そう言って柏木警部はイライラした様子で立ち上がると木村の襟元を引っつかみ部屋を出る。もちろん、向かう先はパトカーの置いてある駐車場だ。

「柏木警部……。気持ちは分からなくは無いですけど、イラつくの

やめません？」

その木村の泣く泣くの訴えに柏木警部も大人気なかったかと立ち止まり、ため息混じりに謝った。

「…わりい。」

そう言ってからパトカーに乗り込み、木村は運転席に乗り発進させた。

つい、昨日の話だ。ヴァンパイア云々が片付いたのは。そして、腹を二度抉られあまりにも失血が多かった彼女は体が動けなくなり……寝た。彼女の正体も家もわからない俺は放っておくことも出来ず、仕方なく連れ帰った。

しかし、マンションに着いてみるとオリガとヴェラの二匹が現れた。

「……付けてきたのか？」

柏木警部が用心深く聞きながら、木村に鍵を渡しドアを開けるよう促した。オリガはそんなことどうでもいいというように柏木警部の腕の中に視線を投げ、指差した。

「くれないかい？」

一応疑問系であるもののオリガは既に手を伸ばしていた。しかし、間一髪のところ木村がドアを開け、柏木警部は倒れ込むように玄関へと入った。倒れ込んだ拍子に背中と肩を強く打ちつけたが目の前にいる危険な存在から目を離すわけにもいかず、そちらを見遣ると丁度、玄関のドアが閉まる部分で手が止まっていた。

オリガは何も無い空間のはずの所に両手をついてため息を零した。「招かれてないから入れない。全く…。運のいい人間達だ。」

そう言ってオリガはまた柏木警部の腕の中を見遣る。柏木警部はこの異様なまでの執着振りに危険を感じ、彼女をその視線から守るように抱えなおした。するとオリガの雰囲気は急に鋭くなった。確かに鋭くなったものの表情や仕草は全く変わっていない。

「…………ソレに触れるな。」

「人を殺さないんじゃないのか？」

柏木警部の質問にオリガは薄く笑った。

「必ずと言った覚えはないな。なるべく、だ。」

そういったオリガにほっそりとした綺麗な手が伸び、柏木警部はビックリして自分が抱えている彼女を見遣ると疲れた表情も露にオリガへと手を伸ばし、掌を向けていた。

「ここに近寄ることも、この柏木警部、木村、両名をその手にかけることも、その周囲の者を殺すことも許さない。刻み込まれなくば、誓約を誓え。」

不思議と頭に響く声に柏木警部も木村も彼女を見てから、仕方が無いというようなため息を零したオリガとヴェラの方を見やった。すると二人はその場に跪いた。

「「誓おう」」

そう言ったオリガとヴェラを見て、彼女は疲れたように言った。

「こいつらは建物内にいる人間に招かれない限りは入れないから大丈夫。あと、目を見ないように。目を見れば、招き入れるように操ろうとするからね。……悪いけど、もうホント限界。」

そう言って彼女はまた目を閉じた。そしてオリガは柏木警部を見、柏木警部は彼女の言葉に従いツ、と視線を外した。

「…………彼女に守られたことに感謝しなければならぬね。君達は。」

そう言ってオリガはヴェラを従えて去っていった。

それまではまあまだマシだった。一応。だが、今朝、体調は良くなったかと寝かせたはずの部屋を覗くと蛻のカラだったのだ。置手紙にはこう書いてあった。

“昨日は運良く助かったかもしれないが、次はない。良く考えて私の正体を探ることを自粛するように。”

するか、馬鹿。

とは、思ったものの、体調の良くなった彼女の後を尾行する気満々だったので、目的も果たせず苛立ちが募っていたのは確かだが、木村の様子にため息をつく。

「…で？　どんな内容だ？」

ようやく言葉を発した柏木警部に木村はホッと胸を撫で下ろした。

「被害者は17才、絢灯学園の2年生で白井浩巳。彼は密室である自分の部屋で死んでいたそうです。目立った外傷も、死体の損傷もなく…。ただ…。」

「ただ…？　どうした？」

言いにくそうな木村の様子に促してみるものの木村は一言返しただけだった。

「見ればわかります。」

現場に着くと鑑識たちの間をぬって部屋へと足を踏み入れる。そこでみた光景に柏木警部は眉間に皺を寄せ、顔をしかめた。

「…これは、これは。」

明らかに他殺体だとも思える死に顔だ。だが、そう決めつけるわけにもいかず、柏木警部は鑑識を振り返った。

「薬の線は？」

「まったくの健康体です。毒などを使われた形跡もないですし、謎だらけですよ。」

それを聞いてから木村を見る。

「密室でしたが、この表情を見ると他殺体としか思えません。被害者がやっていたゲームというのがこれまた謎なんですよ。履歴は全部消されていますし、通信の会社に問い合わせて調べてもらったのですが、記録は一切残っていないといっているんです。それどころか、ネットにつなげた記録さえないとか…。」

「…………家族が怪しいな。話は聞いたのか？」

「ええ。ですが、全員アリバイがあります。ただ、気になるのが弟の方ですね。」

木村の言葉に片眉を上げる。

「弟？」

「はい。小学三年生ですけど…妙に怯えていました。」

「当たり前だ。自分の兄がこんな表情して死んでれば怖がるだろう？」

そういつて柏木警部は死体の表情を一瞥する。

「違うんですよ。なんか、パソコンとか電話を怖がってるんですよ。」

その言葉に柏木警部はため息を吐き、周囲をチラリと見遣って声を落とす。

「何か？ お前は彼女系の事件だともいうつもりか？」

その柏木警部の様子に木村も同様に声を落とした。

「確かにこじ付けかもしれませんが、コレはあまりにもそっち系としか思えませんって！」

「……………」

木村の力説に一応手袋をして被害者の首を動かして首元を見遣るが吸血痕など一切ない。

まあ、人は殺さないようにしてるって言ってたしな…。

「…とにかく、家族路線で調べるぞ。」

「昨日、あんな光景目の当たりにしたって言うのに、結構頭固いんですね…。」

ため息混じりにそういった木村を一瞥するだけで柏木警部は部屋を出て行った。

U n n a t u r a l d e a t h . (後書き)

意外と頭固い警部。。。。

R e l a t i v i t y (前書き)

こ、更新おそくなりました。

気付いたらお気に入り登録が6件も！！！ありがとうございますっ

Relativity

「……………ん？」

璃華は目が覚めてあたりを見渡した。

ここは……ああ……またいつものクセか……

公園のベンチの上で頭も覚めやらぬ様子で璃華はぼんやりとそう思った。

そういえば……

警部たちにお世話になったことを思い出し、璃華は地面を見遣る。すると璃華のしている地面が段々と変化していき、枯葉が紙となり字となる。出来上がったソレに璃華が息を吹きかけるとフツと消えた。

しばらく空を見遣って一言。

「……………帰るか。」

璃華が立ち上がると同時に空気は動き出し、さっきまでいなかったはずの子供達が公園で元気に駆け回っていた。そんな中、璃華は何かの気配を感じて立ち止まると周囲を見渡したが、これといって何もない。あるのは芝生と木、そして電柱だ。

気のせいかと肩をすくめて家へと向かう。

璃華は壁をすり抜け、自分の部屋へ入ると何も無かったかのように制服を身につけ、階段を下りる。

「あら、今日は早いのね。」

笑顔を向けてくる母親に璃華は顔だけで笑顔を作っただけかえした。

「まあね。ところで、今日の朝は……パン？」

「そうよ。璃華は米よりパンが好きって言ってたじゃない。」

璃華に背を向けたままそういった母親の言葉に璃華は表情を曇らせた。

歪みが……

記憶の封印と刷り込み。それは、簡単に説明するとまずは記憶、情報の移動だ。人間は脳のほとんどを使っていないので、その使っていない部分へ情報を移動させるのだ。そうすることで情報のある部位に情報を取りにくるということかもしれない。

だけど、その場所への情報を引き出す機能が生成されてきているらしい。

それにより、情報の整理がされずに取り出されてしまったのだ。それもこれも璃華の力による影響といえた。

パンね…。

璃華はそっと人差し指でパンに触れる。パンは、触れたところから崩れるようにして掻き消えた。

「お母さん、ご馳走様。行って来るね。」

言いながら璃華は背をむけてリビングを出て行った。

「璃華。今日、お父さんとお母さんちよつと親戚の家へ行つて来るから、夕飯はコレで食べて。もしかしたら泊まりになるかもしれないし。」

そう言って差し出された一万を受け取るとわかった、と返事をし、家を出てしばらくして立ち止まり、手に持った一万を見下ろした。たった一晩なのに…。蘇った…。いや、先の会話では緊張感も感じられなかった。まだ、大丈夫。

璃華は一万を財布にしまい歩き出す。

「……あと僅か、か…。」

「なあ。真面目に聞いてんのかよ？」

「聞いている。下僕でなくなっても不思議な能力は消えない、でしょ？　言われなくてもわかってる。」

璃華はそう言いながら弁当を食べ、片手に本を持ち読んでいる。しかし、そのまま無言で翔はその先の言葉を待っている。

その様子にため息を吐くと本をしまい、弁当を片付けると翔に片手を差し出した。

「ようこそ。警視庁刑事部超特殊事例捜査課へ。」

にっこりと笑顔で言う、翔はしばし固まった。

「細かい説明は、職場でね。」

そう言って立ち上がり、思い出したように翔を見下ろした。

「：ああ、言い忘れるところだった。これは、翔の意思で決まるから、拒否したければしてもいい。だけど、それを選択したのならこの先、私に殺される覚悟をしておいて。でも、こちら側には曖昧な気持ちではきてほしくない。決まらないと判断も鈍るし、いざという時：死ぬだけ。」

璃華は淡々と言い置いて動揺の色を濃くする翔をその場においていく。

“力”を持ったのなら、その危険性もその重要性も苦痛も、すべてちゃんと理解しなければならぬ。“力”をもってしまった以上、“普通”は望めない。だから、楽な選択はできないのだ。いや、させてはならない。

すでに翔は苦しい思いをしてきた。だが、ここで逃げてしまえば、やがてそれは歪んでくる。

“なぜ、俺なんだ？”

“他のやつらなんて何も知らない。だけど俺は知っている。使える。”

言っている口調が違えば意味も印象も違ってくる言葉だ。最初は悲観に満ちているだろうが、やがてそれは歪み、周りへの侮蔑に変わってくる。

確かにその向かう方向性はその一つだけではない。だが、割合、人間という生き物は楽を求めてその道に行く確立が高いし、璃華もそらちに嵌まりそうになった時もある。精神的に超えなければならぬ試練がある。翔にとってはまだその試練ではないかもしれないが、その前に選択しておく必要があるのだ。強制ではなく自分自身

の意思で。

どう乗り越えるかによるが、翔はおそらくこちら側に来るだろう。それだけの選択はできる人間だと璃華は思っている。

なぜなら、翔は“記憶は消さない”と選択したからだ。

「君は、人間のわりに結構残酷だね。」

フワッと背後に現れた気配に璃華は顔をしかめる。

「次、背後に現れたら敵とみなすから。」

「…手厳しいな。」

苦笑しながら肩をすくめたその気配に璃華はため息混じりに答えた。

「人間はいつでも楽をしたがる。どんなときでも、ね。でも、コレばかりは、楽な道なんてない。それを追い求めるのなら、闇に嵌るだけ。だから、考える機会を、選択できる機会を与える。己の意思で決めなければ、立てないし、道は歩けない。だから、私は…あえて突き放したんだよ。そうでなければ、翔はいつまでたっても私の中の“考え”を自分の“答え”だと勘違いするから。時には思い悩むのもいいんじゃない？」

「…：本当に人間にしておくには惜しい。」

オリガはそう言って璃華の横顔を見やった。

「丁重にお断りいたしますわ。Mr. オリガ。」

満面の微笑みの中、瞳に宿る光のみが剣を思わせる。その璃華にオリガはもう一度肩をすくめ璃華に背を向けた。

「…気長に待たさ。」

そういつて離れていく気配を感じながら璃華はクラスに入っていくと自分の席に腰を下ろし、読みかけの小説を取り出して読み始める。

するとすぐ隣の会話が聞こえてきた。

「マジかよ？ アイツ死んだの？」

「マジ、マジ。しかも、警察もお手上げ状態だってよ。」

「なんで？」

「……所謂、密室状態らしくてよ。死に顔がものすげえんだって。」
「なあ、やっぱアレって本当だってことか…?」

その一言により、沈黙が続いたので璃華は本を閉じるとそちらに向き直った。

「アレって何です?」

突然の介入にその面々はこちらを見て苦笑した。

「綾瀬さんには言えないよ。」

「あら、私も仲間に入れてくれないんですか?」

思いつきり落ち込んだような声でそういうとそのメンバーは言いにくそうにだが話し始めた。

「今、ネットであるオンラインゲームが話題になってるんだけどさ…。ちよっとヤバイ噂があって…。」

「噂?」

「ああ。なんか、一度始めたらずり終わるまでやめることはできないらしいんだ。しかも、ゲームのキャラクターが死ねば、プレイヤーである人間も死ぬって。」

「怖い噂ですね。さっき言ってらした“アイツ”って方も?」

「そう。俺らも噂信じてなくてゲーム始めちゃったし、しかもア

イツ、昨日ゲームの中で毒飲んで死んだんだ。……したら、今朝、連絡が来て…自分の部屋のパソコンの前で死んでたって。」

「…その方、どこに住んでるんですか?」

「え? なんで?」

「いえ、ちよっと気になって。」

「そう言って目を伏せる。」

「瀬川は、水之公園の近くだよ。」

出た答えに璃華は目を開けた。

今朝、違和を感じたあの公園だ。四方には電線がある。

それきり黙りこんだメンバーに璃華は微笑んだ。

「皆さん、そう深く考え込まないでも大丈夫ですよ。きっと偶然で

す。」

そういった璃華に四人は曖昧に苦笑を零した。

ピンポン…。

玄関の前のインターホンを押すとしばらくしてかけてくる足音が聞こえ、カチャ、と玄関が開く。

「…あら？ どなた？」

「はじめまして。どうしてもお別れを言いたくて…押しかけてきてしまいました。すみません。」

そう言って璃華が頭を下げる被害者の母親であろう人物も慌てて頭を下げた。

「そう。どうぞ、上がって行って。」

被害者の母親は悲しそうにでも自分の息子の友達が来たことを嬉しく思っているのか複雑そうな微笑でそう言ってリビングに引っ込んでいった。璃華はそれを見送ってからためらいも無くあがるとまっすぐに二階へと向かった。

部屋に入ると璃華はドアを閉め、すぐにパソコンの前へといって手を翳す。

焦りに絶望…。恐怖…。そして、闇。

呟くと椅子に座り、パソコンを立ち上げた。デスクトップにあるゲームのショートカットの数々に目をむける。

「どれだろう？」

璃華は適当にそれらの一つをクリックした。その瞬間、璃華の体を何かがすり抜けていくを感じた。

なるほど…。少しでも関与すれば、魂を束縛するわけか…。ディスプレイに突如としてメッセージが立ち上がった。

『お前も神族か？』

璃華は口角を上げた。

相手からの先制を璃華は見事交わした拳句、こちらの情報を少しも向こうに漏らさなかったのである。

「君の言う神族とは？」

璃華が力ある言葉で返すとまたメッセージが出てきた。

『まだまだだな。お前は私にはまだ遠く及ばない。』

「過信は死を呼び込むだけ。」

『……アナタを私の世界へ導こう。決して止るな。』

「君に哀れみを。」

璃華の言葉に帰ってきたのは鋭いナイフだった。それはディスプレイから実体化して飛び出てきたが、璃華の顔のすぐ前でピタッと止まった。

璃華はふ、と微笑みナイフに優しく吐息を吹きかけた。

「呪詛返し、だ。今回はあえて外しておく。」

そういった途端ナイフはUターンし、ディスプレイに戻っていた。そして璃華は躊躇いも無くパソコンをシャットダウンするのではなくコンセントを直接抜いた。

全く不愉快。なんだってこんなの相手にしなきゃならない？ しかも、中身ガキだし。ただ、成績はそれなりにいいみたいで、頭は悪くない。だけど、さっきのでかなり向こうをビビらせ、私の方が上だと向こうも嫌でも気付いただろう。……しばらくは大人しくしてるかもしれないけど、すぐまた付け上がる。時間の問題。早いトコ片付けなきゃ。

「お邪魔しました。」

被害者の部屋をでてリビングの方へそう声をかけると璃華はその家を出て警視庁へと向かった。

いつものように姿を消して警視總監の部屋へと向かう。部屋へ入ってみるとそこにはタイミングよく柊博士が總監と一緒にいた。

「柊博士。ちょっと話が……」

璃華はそう言って警視總監を置いて柊博士と一緒に部屋を出て行

き、警視総監はそれを見送り仕事を再開した。

「で？ 何の用だい？」

柊博士の問いに璃華は博士の研究室へと足を運びながら答えた。

「今朝、起こった事件知ってる？ 高校生の。」

「ああ。密室で死んでたってヤツかい？ でも、“警察”は、自殺
って線で調べてるけど：何か気になることでもあったのかな？」

そう言いながら、璃華を促して研究室へ入るとドアを閉めた。

「それが、ウチの学校のヤツらが噂してるの聞いちゃってさ…。と
あるサイトのオンラインゲームなんだけど、一度やり始めたら、や
り遂げるまで止めちゃならないんだって。途中で止めたらリアルで
死ぬし、ゲームの中で死ねば、やっぱりリアルでも死ぬんだって。
で、気になったから、故人の家へ行って調べてみたところ：ビンゴ
だったってわけ。しかも、今度の相手は私と同じ能力者で“人間”。

」

璃華の説明を聞きながら博士は紅茶をいれテーブルに置くとパソ
コンの前に座った。

「…なるほどねー…。その個人を俺が特定すればいいのかな？」

「いや：それはしなくていいよ。そんなことより、ネット上で結果
みたいな組めるのかなーって思ってる。」

そう言って璃華は簡単な図形を書いた紙を博士に手渡した。

「ふむ…。なるほど。なら、協力を煽ってこの図形は作れるね…。
でも、コレはいったいなんの効力があるんだい？」

「秘密。図形ができればすぐにでも呪文を言うよう促して。多分、
小一時間ぐらい当人達のパソコンが動かなくなるだろうけど、デー
タとか大丈夫だからって言うておいて。あと、結果を促したのが“
峰水高校に通っている誰か”までは情報流していいよ。信じ込ませ
る方法は、任せるから。んじゃ、よろしく。」

そう一言言い残して璃華はその場から姿を消した。

R e l a t i v i t y (後書き)

力のない人間たちの結界・・・一応、呪文ちっくなものに璃華から力を借りるっていうフリーズがあると思っただければ(汗

「警視總監……」

突如部屋に現れた翔を警視總監は静かに見返した。

「ここに来たということは、決意は固まったのかね？」

「……まだです。」

顔をしかめて横を向いた翔に警視總監はため息をついた。

「なら、帰りなさい。ここにいてるべきではないよ。」

その警視總監の言葉に翔は何も言えず、警視總監を見た。

「……………」

その場を動こうとしない翔の様子に警視總監は一度目を伏せた。

「前回の事件で十二分に理解したんじゃないのかね？ 君は彼女をどう思う？ かつこいい？ 立派？ それともそうなりたいかね？」

警視總監は机に肘を着け、顎の前で手を合わせる。

「本当に彼女のようにになりたいのかね？ もしそうなら、止めておきなさい。」

「力を生かして人を助けたい。」

「なら、その命を捨てても被害者を守る覚悟はあるのかね？ 昨日、彼女は君を助ける為にあのヴァンパイアにお腹を二度も貫通するほどに挟られた。君に周りの人全てを騙す覚悟は？ 親や恋人に嘘を付き続ける覚悟は？ 過去人間だとしてもすでに手に負えないような状況の生物をあつさりとは始末する覚悟は？ 彼女は君に言ったはずだ。もし、こちらを選ばなかった時は自分に殺される覚悟をしろ、とね。彼女はとうの昔に答えを出し、君に選択を与えている。」

警視總監は立ち上がってドアの横に立って翔をみる。

「君は彼女と行動していて気付いたはずだ。彼女にあるモノを。君は勘違いしているのじゃないかね？ 彼女が君を突き放した理由を。彼女は英雄ではないよ。」

そこまで言うのとドアノブに視線を向けて翔を促した。

「帰りなさい。まだ君はここにいないべきではない。」

「…璃華は…」

やっと口を開いた翔に警視總監は淡々と述べた。

「仕事中だ。」

そう言って警視總監はドアを開け、翔は少し躊躇った後、渋々といった様子で部屋を出た。それを見送って警視總監はふう、と息を吐き出すと宙に浮いている璃華を見た。

「君は、本当にそうするつもりか？」

言外に、翔がこちらに来なかった場合、つまりはあちら側に行ってしまった場合、本当に殺すつもりか、と問う警視總監に璃華は眼を伏せ、口角をあげた。

「ある程度、固まるまでは、ね。」

そう言い、璃華は床に足をつけると思考を切り替えるように警視總監を振り返る。

「それはそうと、今朝の事件。担当者は誰？」

璃華の問いに警視總監は資料をちらりと見下ろした。

「……君がよく知っている者だ。」

「…最悪。…ま、いいわ。じゃ、また。」

そう言って姿を消して警視庁を出ると適当な場所で姿を“女子高生、綾瀬璃華”に戻し、見えるようにして自分の家へと向かった。

「っ…くそ!! “力”が効かないっ!」

大学生ぐらいの男が苛々しながらそう呟いた。その呟きを周りにいる同様にインターネットカフェを楽しんでいる人達は聞こえていながらも、特に気にした風も無く己の遊びに興じていた。そう、オンラインゲームを。

その男は他の人がどこからどう見てもオタクとはかけ離れた容姿

をしていた。所謂、美青年の類だ。

何を思ったのか男は手近においてあってコップを凝視した。するとコップは僅かに浮かび上がり、そろそろとテーブルの上を移動する。

ちゃんと“力”は使える。

そう確認すると再度、画面を見、試してみるが一向に“力”は効かない。そればかりか、ゲームの参加者達がここぞとばかりに退会していく。

問題は何だ、と、潜り用に作った自分のキャラクターでまだ退会していない人物に話しかけた。

『なあ。なんでみんな平気で退会していくんだ？ 怖くねーのかな？』

『大丈夫じゃね？ なんか、今、噂になってるんだけどさ。“Silver”とかいう人物が結界だとかを張ってくれたんだと。んで、試しにって抜けたヤツ、死ななかったから、今のうちってな。俺も、まだまだ生きてえし、退会するわ。じゃな。』

『ちよっ！ 退会する前にもう一つ聞きてえんだけど。そいつの情報って詳しくわかるか？』

『ああ。俺もあまり詳しくねえんだけど、確かなのは、東京の峰水高校に通ってるって話だけだな。』

『そっか。峰水高校ね。サンキュな。』

『おう。』

そう返事が返ってくると画面の話していたキャラクターが灰色になり、退会しました、とのメッセージが浮かび上がった。

俺が教育実習で行く高校か…。好都合だな。

男はそう考えると荷物をまとめてカフェを出て行った。

「あゝ…今日から教育実習にこられた明津智也さんだ。」

担任の言葉にさわやかな笑顔を浮かべる若い教育実習生に女子生徒は食い入るように見つめた。その女子達に呆れた視線を投げる男子生徒。

その教室内を見回し明津智也はこちらを見ようともせず、窓の外を見ている女子生徒に気づいた。

「こら、綾瀬。人が挨拶をしているんだ。ちゃんと前を向きなさい。」

このクラスの担任が目ざとくもその女子生徒、綾瀬に注意を促し、生徒は少し気だるげに前を向いた。それを見て取ると明津智也は軽く頭を下げる。

「明津智也です。担当は、科学。皆さん、よろしく。」

そう言って笑顔を見せる教育実習生をそのまま残して担任は一言二言言い置いて部屋を出て行った。何故なら次の授業は科学だからだ。

明津智也は、その後軽くHRをするとそのまま生徒達に化学実験室へ移動するように指示を出した。

「はい。今日は教科書138ページにある硫酸を使った実験です。で、各自取り扱いには注意するように。では、各々必要な材料を取りに来てください。」

そう言って明津智也は、それぞれの班を観察していく。

どこをどう見ても普通の高校生達だ。

ふと一見違和を感じる班があり、そちらへ視線を向けた。

あれは、確か。同時期に転向してきた生徒達だ。話を聞いた時は、まさきに疑った。同じ時期に、転向してきた生徒が同じクラスへ入るなど前代未聞だ。それも二人。このクラスの担任に話を聞いたところ上の要請だということだったが……。

他の班を回りつつ、その班へ近づいていく。

「君たち…なんで何もしていないのかな？」

彼らは、互いに黙って何もしていなかったのだ。すると留学生が小ばかにしたような笑みを浮かべた。

「なぜ、アナタの指示を聞かねばならない？ 教師ではないのだから？」

「……確かに私はまだ教師ではないが、立場は君よりは上だよ。実験をしなさい。」

そう言うところの班のメンバーは視線を合わせ、しばらくして行動を始めた。

全く高校生は手に負えない。

そう思いつつ、反論をしたオリガという生徒を一瞥し、硫酸を見る。すると硫酸がテーブルの端に在り、隣の班の生徒の肘が当たったのに気付いた。

「……っおい?!」

思わず声を出したが、結局硫酸はテーブルから落ちた。硫酸がかかって当然の位置にいたはずのオリガは全くの無傷で面倒くさそうな表情でこぼれた硫酸を見下ろしていた。

明津智也は、視線をオリガと硫酸との間を何度も行き来してからとりあえず、オリガの安否を聞き、硫酸の片付けを始めた。

しかし、その頭の中は硫酸が不思議にもかからなかったオリガのことについてだった。明津には硫酸の液体が不自然にオリガを避けてこぼれたように見えたのだ。

ようやく片付け終わりふ、と顔を上げて二つの視線に気付いた。

嵩瑞翔と綾瀬璃華の二人だ。

綾瀬璃華は視線が合わさると何のことも無いように平然と視線を手元に戻したが、嵩瑞翔はこちらの視線に気付きもしないのか硫酸を見、オリガを見て呆れたような表情を浮かべていた。

「オリガ。お前さ、先生手伝えよ。」

その嵩瑞翔の言葉にオリガは嵩瑞翔を向いた。

「何故だ？」

「普通の人間は、相手が年上とか、立場が上の人とか、教えてくれる人を敬うんだよ。」

「……翔、ソレを本気でこの俺に言っているのか？」

押し問答のような会話に綾瀬璃華がため息をつき、一言。

「翔さん、オリガさんに何を言っても無駄です。貴方は貴方のすべきことをしたらいいかがです？ それに、オリガさん、ここは故郷とは勝手が違います。こちらの常識に慣れてもらいませんと。」

その言葉でまたこの班の会話は無くなった。

普通の会話に思えるこのほんの少しの会話に明津は違和を覚えた。
なんなんだ…？

その面々をしばらくじっと見据えるがすぐに踵を返し他の班のところへ向かった。

その背を綾瀬璃華の視線が追っていったことなど知らずに。

Forgetting

「で？」

「で？　じゃないでしょう？！　なんで、自殺で片付けられてんですか？！」

木村の引かない様子に柏木警部は眉間に皺を作って見返した。

「他殺の線が消えたからだ。」

「…え？」

困惑する木村にため息をつき、座るよう促した。

「確かに死に顔は気になるが、家族全員アリバイがあって部屋も密室。それに隣家の窓とも離れてる。他殺がありえないんだよ。だが、あの顔じゃあ、自然死でも納得できんだろう？　だから、自殺ってことになったんだ。」

そう言って話も終わりという風に立ち上がった。

一応、木村も立ち上がるが携帯電話が鳴り、柏木警部とは全くの反対方向へと去っていった。それをチラッとみやって柏木警部はまたため息をついた。

木村の言い分もわからんでもないが、思考がすぐに偏りすぎた。確かに“自殺”ってなったが、それは上からの要請でもあった。

確かに捜査の費用が馬鹿にならないし、口には出せないが完璧な密室、薬の線もないとなると時間の無駄ともいえる事件だ。確かに死に顔が不自然ではあったが、他殺の線はどうしたって在り得ない。

「柏木警部！！」

突然呼ばれ、顔を上げると木村が走ってこちらに向かってきていた。

「どうした？」

「例の事件の家に、彼女が来たみたいです。」

「……彼女？」

「ええ。なんとなく聞いてみたんですよ。その後誰かお見舞いに来

なかったかどうか。そしたら、峰水高校の女生徒が来ただけだ。」

その木村の言葉に何を言いたいのか悟った柏木警部は呆れた。

「あのな…ガイシャも峰水高校だろう？ それに、高校生なんだ。

彼女の一人や二人、いたっておかしくない。だが、ソレをアレと同じに捕らえるのはどうかと思うぞ？」

そういった柏木警部に木村は一枚の拡大写真を目の前にちらつかせた。

「残念ですが、ここ数日で調べ上げたので間違いありません。この写真を送ってみて、確認もとりましたしね。」

「……………」

木村の行動力にあきれるやらなんやらと色々思うところはあっても、の、事実がコレでは何も言い返せない。

それに、“彼女”の専門分野であっても、こちらにはこちらの仕事がある以上、こちらも放棄はできないのだ。

「……仕事が終わったらな。」

ようやくでた言葉に木村は割れんばかりの笑顔を顔に浮かべ、自席へと戻っていった。その後姿に胸のうちでため息を漏らす。

確かに俺は“彼女”の正体を暴くと宣言したし、正直言ってこんな仕事など放り出したいとも思っているが、すぐにその方向へは持って行こうとは思わない。なぜなら、彼女と必ず接触できる情報は一応持っているからだ。

木村には仕事が終わったら、などと言ったものの、時刻はすでに終業時間。今日は午後3時迄なのだ。

柏木警部は上着を手にとって立ち上がり、退勤記録を打ってから駐車場へと向かう。するとそこにはもう準備を済ませた木村が待っていた。二人はそのまま柏木警部の車に乗り込むと峰水高校へと向かった。

高校の正門付近に車を停車させると下校時刻なのか生徒達がゾロゾロと出てくる。門の両脇には教師が立ち、時に生徒に注意し、挨拶を返している。数年前までその絵の中に自分が居たのを懐かしく

思いつつ車を降り、タバコを出して火をつけていると木村が呆れたようにこちらに視線を向けてくるのに気付く。

「柏木警部：、自分がどれだけ目立つのか自覚してますか？」

「どこが目立つってんだ？ いたって普通だ。」

そう言い切る柏木警部を横目に見つつ、ため息を吐いた。

比較される身にもなつてくさいよ：。

柏木警部はその若さで警部になったエリートであるだけでなく、その容姿はさながらどこかのモデルのように整っている。おまけにここは高校のまん前だ。

木村の懸念はそのまま眼の目の情景に現れている。女子高生だけでなく男子高生もこちらを気にしている。だが、柏木警部や木村の明らかに誰かを待っているような体勢に誰も声をかけてこないのだ。

「：おい。来たぞ。」

柏木警部の言葉に顔を上げるとオリガと少年とあの少女が校門の傍で三者三様の表情でこちらを見ていた。オリガは面白そうに、少年は顔をゆがめ、少女は知っていたかのように。

少年はその集団から離れ、逃げるように帰っていき、オリガと少女はこちらにまっすぐに近づいてきた。

「どうしてこちらへ？」

至極優雅に少女から発せられた言葉に柏木警部はいぶかしみながらも車に乗るよう促した。

「ここじゃできん話をしに。」

「それは困りましたね。生徒をどこへ連れて行くつもりですか？」

突然の参入者に柏木警部は方眉を上げて振り返ると少女がその人物の前に立った。

「明津先生、彼は知り合いですので心配は要りません。身元もしっかりしている方です。何しろ警部なんですから。ね？ 柏木さん。」

少女の様子に少しいぶかしみながらもとりあえず、本当のことなので同意しておく。

「：ああ。」

「そうですか。大変失礼致しました。ところで、…オリガ、君は確かイギリスからの留学だったな？」

そう言ってオリガに話しかけた明津にオリガは肩をすくめた。

「向こうの話を聞きたいんだ。ついでに明日の実験の準備を手伝って欲しいんだが…。」

と、続けてそういった明津に璃華は遮るように言った。

「なら、是非私もお手伝いさせてください。」

突然何を言い出すんだ、と柏木警部と木村は思った。二人だけでなく明津という教師もマジマジと少女を見ている。そして、当の本人はなんのこともないように続けた。

「柏木さんには悪いんですけど、ここで待つのもなんですから一緒に帰しません？」

“どうする？”

問いかけられた後、頭の中に響いた声に柏崎警部と木村は顔を見合わせ、そして、頷いた。

「俺達も今日でなければならぬ用があるしな。」

一行は科学室へと向かった。

教室についたのもつかの間、明津は放送で呼び出され職員室へと行ってしまった。

それを見送って璃華はオリガに顔を向けた。

「どういうつもり？」

「何をだ？」

わざとらしくそう答えたオリガに璃華は忌々しそうにため息を吐く。

「気付き始めてる。」

その言葉にオリガはほう、と片眉をあげる。

「オリガ。むやみやたらに使うんじゃない。いい迷惑。大人しく硫酸かぶっとけ。」

「それは遠慮するよ。かかれば、必然的に病院などという場所へ行かなければならないだろう？　心臓を動かしたり、体温を上げたりと面倒だ。それに、治癒力を弱めるなんて余計な労力は使いたくは無い。」

「なら死ね。そうすれば、私が記憶を消せば済む。」

「どんな雰囲気が悪化する目の前の二人に柏木は一言。」

「いい加減にしろ。話の要領が見えない。」

その一言に木村はホッとしつつ、柏木の様子がまるで子供の喧嘩を止める親に見えてしまった。絶対に言えないと思いつつも木村も加勢に入る。

「そうですよ。こちらにも分かるように話してください。」

その木村に何故、敬語をつかうんだ、と疑問に思いつつ柏木は自分の横の机に腰掛け、オリガに一発を叩き込んで少し機嫌の直った少女をみやる。

「今日の科学の授業で硫酸を使った実験があつて、その時、硫酸が零れたんだけど、オリガはそれがかかって当然の位置に居たにも関わらず、力を使ってそれを避けた。それをあの教師が目撃して、明らかにおかしい硫酸の動きに気付いた。」

「なるほどな…。」

そういった柏木警部に璃華は視線を向ける。

「で？　貴方がたは何を聞きに来たの？」

「白井浩巳の件だ。事件後、彼の家へ行っただろう？」

その問いに黙っていると柏崎は続けた。

「こちらは“自殺”で、カタが付いたんだが、木村が君の行動に気付いたんでね。」

そういうと璃華は肩をすくめ、一言。

「カタが付いたんなら、柏木警部、木村警部補。貴方がたには関係の無いコトじゃない？」

表情はふざけている風でも眼が笑っていない少女を見やって柏木警部は内心ため息を吐いた。

そりゃそうだろうな。彼女は俺をうっとおしく思っている。そう易々と情報を提供してくれるはずが無い。

「まあ、そうだが、聞いてもいいか？」

その問いかけに璃華はどうぞ、と先を促した。

「犯人は、人間か？ 人外か？」

「人間。」

璃華が言い終わると同時に教室のドアが開き、明津が入ってきた。「おまたせ。」

そう一言いって明津は教室の置くにある準備室のドアに向かった。璃華はその明津の背を視線で追う。

気配を感じなかった。だが、一応音が漏れないようにしてある為、会話をしていたことは気付かれていないはずだ。

ふ、とオリガを見てみると面白そうにだが、明津を見ていた。

「綾瀬さん。机の上に座るのはよしなさい。」

背を向けたままの明津に璃華は音無く床に足をつけ、一言。

「すみませんでした。」

その璃華の言葉に明津は振り返って璃華を一瞥するが何も言わず、オリガを見た。

「さ、準備を手伝ってくれ。」

その一言で璃華とオリガは動いて何の不自然も無く準備が終わった。

一行は、準備室に座り、明津がオリガに故郷の聞くのを黙って聞き、オリガによる発表会、もとい説明会が終わるとオリガは疲れたといってさっさと帰っていった。

璃華はぴったりとついてくる警部二人を連れ、喫茶店へ向かった。「で？」

紅茶を一口含み、問うように方眉を上げる。

柏木警部は少し周りを気にしつつも肩をすくめた。

「君の通っている学校はわかっていても、その他の君の情報が一切わからない。調べようにも学校の書類にも残ってないし、そもそも

君が学校で使っている名前も役所にはない。」

柏木警部のどうせ答えてくれないだろう的な言い方に目を細める。

「…ねえ。私はそこまでの犯罪を犯した覚えはないし。むしろ、事件解決の手助けをしている。違う？」

「違わないな。」

即答した柏木警部は璃華から一切目を離さずにコーヒーを一口にする。

「君が俺らをうっとおしく思っていることは知っているが…。だからこそ、聞きたい。記憶をいじれる力を持っているのに何故俺らにそれを使わない？」

「それだよ、それ。」

ため息交じり言う。

「あなた方は記憶をいじれる事を現実として捉え、事実として把握している。人間って言うのは大抵が小賢しいものでね。あなた方：特に警部のほうは、“忘れた”時の為に対策をしてあるでしょう？」

そう指摘すると柏木警部は惚けた様な顔を浮かべる。

「ほお。そういう予防もあるんだな。」

今気づいたといわんばかりの警部の様子に璃華は米神を揉む。

「まあ、確かに時間稼ぎになるし…、やる価値はあるかもね。」

米神を揉んでいた指を止め視線だけで二人を見据える。

――『Not move.』

ぴたりと固まった柏木警部と鈴木警部補にすこし苦く笑いながら、立ち上がる。

「願わくは、完全に忘れることを。『Seal』」

璃華は人差し指でそれぞれの額を弾く。

弾かれた二人の目は虚ろになり、ゆっくりと目の前のテーブルに突っ伏した。それを見届け、自分の飲んでいた紅茶と飲み干すとカップを鈴木警部補の方へ寄せ、店を出て家へと向かった。

F o r g e t t i n g

(後書き)

更新遅くてすみません；
次は10日後の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0222q/>

Silver of Mask

2011年5月29日02時11分発行